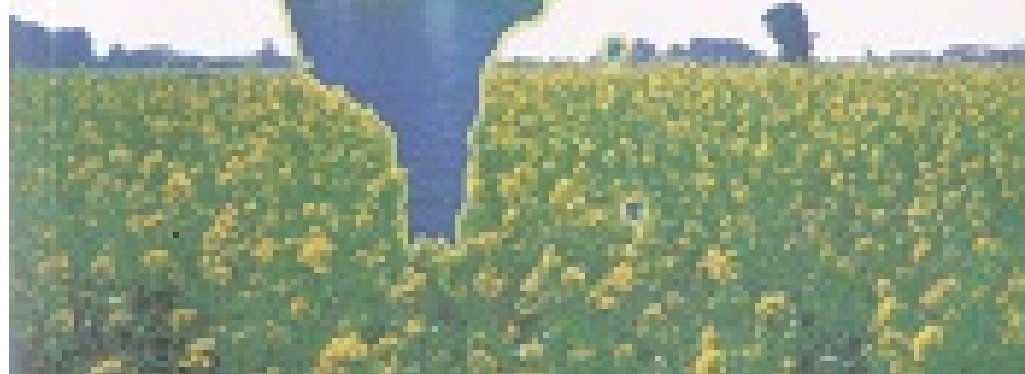


台灣見聞錄

編者 曹天海



目次

はじめに	1
第一章 台湾あれこれ	
中山先生	4
台湾を旅する	6
台湾の交通	9
台湾人の食生活	12
バスに乗る	16
住まい	17
台湾の学校	19
言葉	22
幼稚園	24
第二章 台湾の年中行事としきたり	
春節（台湾の旧正月）	30
ゴールデンウィーク	34
端午節	36
プレゼント	38
鬼月	41
中秋節	42
結婚式	45
拝拝（パイパイ）	48
名前の呼び方	50
第三章 ウォッチング台湾	
ロードショー	54
テレビ	56
見る	58
台湾のチューインガム（ビンロウ）	60
町の中の日本発見	61
台湾の靖国神社	63
台湾に住んでいる「日本人」	66
第四章 エッセイ	

靴磨きのおじさん	70
ホントウの話	72
カトウキヤク' は下等客?	74
お茶の話	77
千支の由来	78
恩師からの便り	80
第五章 「台中」 紹介	
台中の町と歴史	84
温故知新	85
台中公園	88
太陽餅	90
秋祭り	92
台日会 (台日交流聯誼会)	95
第六章 特別編	
海角七号真实版	98
台湾版五体不満足	103
白冷圳	109
あとがき	114

はじめに

はじめに

台湾は日本から飛行機で約四時間。日本とは距離的にも歴史的にも密接な関係があるところ。同じ資源のない島国同士でも、習慣、文化、考え方など私たち日本人の物差しでは測れないところがたくさんある所なんです。そこで、台湾について 20 の質問をします。イエスの時は Y，ノーの時は N で答えて下さい。

- (一) 台湾にも年号がある。
- (二) 図書館で日本の雑誌「文芸春秋」や「中央公論」が読める。
- (三) ただでロードショーが楽しめる。
- (四) 台湾には日本と同じ地名が多い。
- (五) カラオケは五つの言語で歌える。
- (六) 一年中ちまきやおかゆが食べられる。
- (七) 「ニイタカヤマニノボレ」の新高山は台湾にある最高峰の山だ。
- (八) 台湾の漫画はほとんど日本の漫画のコピーである。
- (九) 毎日、日本の新聞やテレビが見られる。
- (十) 出国者数は五人に一人の割合にのぼる。
- (十一) 台湾に畳屋さんがある。
- (十二) 「おじさん」「おばさん」は台湾語である。
- (十三) 日本人の子供にすべて日本語でしかも日本式のやり方で教えてくれる幼稚園がある。
- (十四) 台湾には三越、SOGO、高島屋など日本の有名なデパートがある。
- (十五) 結婚式に白いネクタイはタブーである。
- (十六) 天気予報で「午後から雨」といっても傘を持たないで外出する。
- (十七) 転職歴が多いほど就職に有利である。
- (十八) 道路を利用して葬式しても警察から怒られない。
- (十九) 横断歩道を渡っていてもクルマは止まってくれない。
- (二十) 十元の買い物で現金で千元もらえることがある。

どうでしたか。意外と頭を悩ます問題もあったでしょう。答えは本文を

読んでみてください。台湾の人達は日本のことをよく知っているのに、
私たちはあまりにも無関心というか、知らなさ過ぎます。

台湾に住むようになって早 20 年。台湾のことをもっと知ってもらいた
い気持ちで、いろいろ見たり聞いたり体験したりしたことを、日常生活
に視点を置いて書いてみました。皆さんの興味・関心のある所から読ん
で見て下さい。

第一章 台湾あれこれ

中山先生

「皆様、ようこそ台湾にいらっしゃいました。今日から3日間皆様のお伴をさせて頂きますガイドの王と申します。どうぞよろしくお願ひします。」

ここは空港から台北に向かっている専用バスの中。ガイドさんの挨拶に始まって今日のスケジュールなどを聞いています。

台湾のガイドさんの日本語の堪能さに、台湾に初めてやって来た日本人観光客は誰もがビックリしています。

では、その後のバスの中の出来事を再現してみましょう。

「皆さん、今走っている高速道路の名前をご存知ですか？ ちゅうざん高速道路と言ひます。ちゅうざんという字は真ん中の中に山と書いてそう中山です。中山とは国父つまり中華民国の建国の父である孫文先生の名前なんです。ついでに申し上げますと、皆様方が飛行機で降りた空港は中正空港と言ひて、中正とは先の蒋介石総統の別名なのです。この二人は特に偉大な指導者ということで、台湾には二人の名前（中山、中正）をつけたものがたくさんあります。それでは、まず中山の名前のついた所から言ひますと、道路の名前に中山路ですね。これから参りますホテルは中山北路にあつて、日本統治時代からある台北で一番風格のある大通りなんです。そしてこの中山通りはどんな町にもありますよ。それから中山公園、中山病院、中山堂などなど、虎は死んで皮を残すそうですが、偉大な人物は死んで名を残すんですね。えっ！ 誰？ 私の親父は借金山を残したなんて言ひする人。」

(バスの中大爆笑)

「孫文先生は日本に住んでいたことで知られていますが、では先生に名前がつけられた日本の有名な所がありますが、どこでしょうか？」

「本当にそんな所ある？ 誰でも知っている所だつて？」

バスの中が騒然としてきました。

「孫文の名前がつけられた所なんて日本にあるわけないよね。」などいろいろな意見が飛び交ひました。

すると、ガイドさんがしばらくたつてから澄まし顔で、こう言ひたのです。

「なかやまと言ひば、ほらあの中山競馬場ですよ。皆さん、知っているでしょう？」

この答えを聞いて誰もがギャフン。

若い女お子は一言

「ウソー」

それ以来このガイドさんは皆から「中山先生」とよばれてしまったのです。

(注) 当時の中正空港は現在桃園空港と改名されています。

台湾を旅する

日本人の台湾観光で必ず訪れる所と言えば台北、花蓮、高雄です。まず、台北で日本人に人気のある観光スポットと言えば、故宮博物院や圓山ホテル、總統府などが挙げられます。皆さんの中にも行ったことがある人が多いと思いますので、あまり観光ガイドブックに載ってない話をしましょう。

故宮博物院には、はかりしれない価値のある国宝級のものがたくさんあるのです。展示スペースなどの関係で一度に展示できるのは約二万点ほどで、3ヶ月ごとに一部が入れ替えされているとか。でも総数六十万点を越えるといえますから、もし全部見ようとするなら、いったい何年かかるのでしょうか。現地のガイドさんが主な展示品をユーモアをまじえて説明してくれますから、個人旅行で来た人は団体客の中に紛れ込んで聞いたほうがいいですよ。

故宮博物院のあとは圓山ホテルで記念撮影です。台湾の人たちは外国から帰って来た時、飛行機の機内から圓山ホテルの姿を見た瞬間「ああ、わたしは台湾に戻って来たんだ」という特別の感慨を持つそうです。きっと、日本人なら富士山を見た時の気持ちと同じなのでしょう。ところで、このホテルは以前台湾神社があったところなんです。えっ？ガイドさんに聞いたって。

總統府も日本時代は台湾総督府だったのです。今から約八〇年前に建てられたルネッサンス式のレンガ造りの立派な建物です。韓国にあった旧総督府が取り壊されたのに比べ、永久保存されるといいますから対象的です。毎年十月十日の国慶節の時はこの總統府前で盛大に記念式典が行われるのです。国慶節の夜、ここはライトアップされてきれいですよ。

じゃ、つぎは飛行機で花蓮へ行きましょう。花蓮は多くの日本人が移民した所です。初めて花蓮を訪れた時こんな事がありました。知人のクルマで花蓮を案内してもらっていると、昔の日本人部落に

着いたのです。一瞬「ここは本当に台湾？」と思ってしまいました。
クルマから降りて、ある家の玄関口で「ごめんください」と声をかけると、家の中からおばあさんの「はい、何でしょうか」なんて上手な日本語で返事が返ってきたのでビックリしてしまいました。もちろん、その後おばあさんから家の中を見せてもらい昔のことをいろいろ聞かせてもらったのです。

さて花蓮は大理石とタロコ峡谷が観光資源。タロコ峡谷を見なければ「お前は何しに来たんだ。」と花蓮の人から怒られてしまいます。タロコ峡谷は別名「リトル・グラウンド・キャニオン」と呼ばれているほどの絶景地なんです。タロコ峡谷の中に観光バスから降りて歩く所の一つに慈母橋と呼ばれる橋があります。約八十メートルの橋の欄干は白い大理石で作られ、橋の入り口には左右にこれまた白い大理石で彫った唐獅子（コマ犬）が対になって立っています。雄獅子と雌獅子の区別はどう見分けるか知っていますか。また橋を渡る時おもしろい習慣があります。どんな習慣だと思いますか。唐獅子の話は次の機会に残してとっておきましょう。（唐獅子の項を読んでね。）ああ、それから原住民阿美族の踊りも見てくださいよ。阿美族文化村で毎晩二回ショーがあり、特に中秋節（満月の夜）の豊年祭りは盛大ですよ。

花蓮で楽しい夜を過ごした翌日は高雄です。高雄でぼくが気に入っている所があります。そこは澄清湖という「台湾の西湖」とも言われているきれいな所です。ここの八景の一つに「九曲橋」があります。ここの橋は文字通り直角に曲がった角が九つあるのです。だから上から見ると大きな九つの階段に見えるのです。どうして、こんな形にしたかと言うと、魔除けのためなんだそうです。ここを訪れてきた人は、直線にすると二〇〇メートルほどの橋を必ず歩いて渡って厄払いをするのです。悪魔は真っ直ぐしか走れないので、悪魔に追い掛けられたら曲がりくねって走れば、悪魔を振り切ることが出来ると言う訳です。九曲橋から歩いて駐車場に行く途中、松の木のところにおじぎ草が生えていました。誰もがおもしろそうにおじぎ草を採って指で触れるんです。するとどの草も「ありがとうございました。またお越し下さい。」と言うかのようにお辞儀をしたのです。

高雄は清朝時代には「打狗」と呼ばれていて、この発音が日本語でタカオに聞こえたので「高雄」になってしまったのだそうです。もっとも、戦後の読み方は中国語で発音されますから「タカオ」は日本式読み方です。この他にも、台湾に日本人が残していった地名は少なくなく、台北の萬華、台北のとなりの三重市、板橋市のほか、台中のとなり豊原、南投県の名間、台南県の玉井、高雄県の岡山、台東県の池上など数多くあるのです。台湾の地図をみていると、日本の地名がたくさん発見できて楽しいですよ。

なんだって、台湾の南の島にも琉球があるんですから。

また、それからこんな話も聞いたことはありませんか。

台湾で最高峰の山「玉山」(3952m)は富士山より高い山だということで、戦前は「新高山」と呼ばれていたのです。それで第二次大戦(真珠湾攻撃)のときのあまりにも有名なかの暗号文「ニイタカヤマニノボレ」に登場したわけなんです。ちなみに二番目に高い雪山(3884m)は昭和天皇が皇太子のとき台湾に見えられた際に「次高山」と命名されたんだそうですよ。どうですか。台湾がぐうんと身近に感じられるでしょう。

*台湾の山は上位12位までが富士山より高く、そして三千m級の山々は49もあるのです。また、なんと中央山脈の合歡山(3416m)にはスキー場があったんですよ。どうですか。台湾の山にも、雪が降るなんて知らなかったでしょう？

そういえば、以前家族連れで花見に新宿御苑へ行ったら、家内が「台湾閣」と呼ばれる中国式あずまやを発見したのです。新宿御苑にも「台湾」があったので、その時の台湾閣から見た桜は、前日の時ならぬ雪化粧とで、とても印象的で忘れることのできない思い出となったのです。



台湾の交通

台湾の交通事情は耳で聞くよりもはるかに想像を越えています。クルマ公害は日本ばかりではありません。ここ台湾も実情は同じです。人口比率で勝負したら台湾にかないません。なにしろ、日本の10分の1の狭い面積に2000万人の人口。そして、オートバイなどの二輪車は800万台、クルマは400万台にのぼる車輛が走っていると言われていています。だから子供とお年寄りを除いてみんなバイクかクルマをもっている計算。せまい道路は、半分は青空駐車場になってしまい、通れるのはクルマ一台分だけなのです。台湾の交通は日増しに深刻化しているのです。1978年高速道路ができた頃は、クルマの数も少なく、台北から台中まで一時間半で来れたそうです。それが今では連休の時などは、高速道路がそのまま巨大な駐車場になってしまったかのように全然進めなくなってしまうのです。

「朝八時のバスに乗るから、遅くとも昼までには着くだろう」と思っていたら、台北から台中まで（約170キロ）9時間もかかってしまった人など。今ではこのような体験を持っている人は珍しくありませんが、それにしても何か解決策がないのでしょうか。日本だけでなく、ここ台湾も同じ悩みです。台湾の交通部長（日本の運輸・郵政大臣に相当）は「いくら政府がハードを作ってもソフトが出来てなければだめだ。まず、みんなの交通ルールを守ろうとする意識変革のほうが先決だ。」と言っていますが、全く同感です。

台湾ではクルマは右側通行です。台湾を初めて訪れた日本人が真っ先に面食らうのは交通事情に違いありません。青信号で横断歩道を渡っているのに、右折車がこっちに向かってくるのです。時には赤のはずの向こう側からもやってきて、横断中に信号が変わろうものならばもう最悪です。体力に自信のない人にとっては、まさに「命がいくらあっても足りない」のです。

台湾の人の運転は大変上手と言うべきか、危ないと言うべきかハムレットの心境になるときがあります。スピードが速いし、車間距離をあまりとらずに運転し、少しでも他のクルマより先に行こうとしているのです。バスもタクシーも「おらが先」とばかりジグザグ走行するのです。ラッシュでなくてもクルマが渋滞しているときはバイクもまた、せまいクルマの間をすいすいと前に進むの

です。だから、台湾では、蛇行運転は最も必要な技術のひとつと言えるでしょう。

ある会社の社長さんはおもしろい話しをしてくれました。

「君ね。台湾の人は仕事は日本人のように速くないけれど、運転だったら速いよ。だから、ハンドルを持たせて仕事させてごらん。きっと日本人に負けないよ。そうわない？」

こんな交通状況下で事故が少ないのは不思議です。交差点の真ん中で事故がおきても、ぶつかったクルマはそのままにしておくのです。日本だったら大変ですよ。ここ台湾では事故を起こした当事者たちは、周りが渋滞し始めても気にせず口論しあっているのです。まもなく、警察が来ますがほかのクルマは何ごともないかのよう、事故車を避けて徐行しながらそばを通るんです。誰も文句を言う人はいません。ほかのクルマが急に割り込んで来ても、歩行者が急に飛び出して来ても、怒鳴るようなことはしません。だってお互い様なんですから言えるはずがないでしょう。

そんな訳で、事故を起こすのは運転未熟な人。台湾に住むためには運転も歩行も「技術一流」が要求されるのです。

朝夕のラッシュ時はまさに「すさまじい」の一言に尽きます。台湾人のある知人は「君ね。台湾で運転できたら、世界中どこへ行っても大丈夫よ。」

また、あるタクシーの運転手は

「台湾のドライバーはみんな一流ですよ。え？ 二流の人？ そんな人全部死んじゃったよ。」と極言してはばからないのです。日本の常識はまず通用しないと考えた方が無難です。例えば、交差点でまたは横断歩道で歩行者が歩いているとき、日本だったら、クルマは必ず止まってくれます。しかし、ここでは、クルマ優先とばかり速度を落とさずやってくるのです。だから、歩行者は駆け足で渡るか、クルマがとぎれたすきをついて渡らなければならないのです。歩道を歩いているとき、前からバイクがやってくる時があるのです。だから、歩道だからと言って安心してはいられないのです。



台湾の交通状況取材日記より

今、私は台湾の交通事情を取材するために市内のある高校前に来ております。この高校は昼、夜の二部制で生徒数は約七千人のマンモス高校です。校舎は5階建ての近代的なビルで各教室からは燦々と灯りが洩れています。夜間部の生徒は約3千人。みんなバイクやバスなどで通っているそうです。まもなく下校の時間になろうとしています。スクールバスが10台ほど校門の中と外に待機しています。バスと言っても観光バスのような大型バスです。交通整理のため何人かの生徒が腕章をつけて準備しています。あっ、チャイムが鳴り始めました。生徒が教室から飛び出して来ました。誰もが早く自宅に帰りたいために駆け足です。まるで、終電車で帰って来たサラリーマンがタクシー乗り場へと走っていく光景のようです。駐車場からバイクが出てきました。校門の所はたちまちバイクでいっぱいです。またスクールバスにもぞくぞくと生徒が乗り始めています。あっ、いっせいに今スタートしました。ものすごい騒音と排気ガスです。ただいま、時刻は夜9時50分、日本時間10時50分です。毎晩この時間になると夜間高校付近はカーレース場と化すのです。片側三車線が200メートルほどバイクやバスで埋め尽くされております。今この先の信号が赤に変わったのですべての車輛は信号をいまや遅しとばかり待っております。まさに壮観といった感じです。あっ、待ち切れず一台のバイクが飛び出しました。これにならってほかのクルマ、バイクが交差点の中に入りました。もう歯止めがききません。いまやっとな青信号に変わりました。ものすごい爆音です。なんとも形容の表現がありません。ただただ無事故で帰宅する事を祈るのみです。高校前からの実況中継を終わります。

台湾人の食生活

台湾の人達が人と会った時に「ジャッパーボエ」という挨拶の言葉があります。これは、もう食べましたか、と言う意味で、日本人ならさしずめ「いい天気ですね」のような感じでよく使われます。台湾では「民は食を以て天と為す」食べる事ほど重要なことはないのです。台湾の人にとって、天気は二の次どころか十の次かもしれません。だって、季節は日本のように四季がはっきりしていないし、一年中暑い？ わけですから、天気のことはいわば、どうでもいいことなんです。

以前の台湾の農村の主食はサツマイモでした。痩せた土地でも育てやすく、安いし、食べた後は空腹感を満たしてくれるからです。台湾は形がサツマイモに似ていると思いませんか。サツマイモは強靱で悪い環境にも堪え忍ぶ...台湾の人達は自らを「蕃薯仔」(芋っ子)と言ったりしていたのです。

サツマイモと言えば、終戦後しばらくの間食糧不足で、ぼくも小さい頃ご飯やおやつ替わりとして、よくサツマイモを食べさせられました。

もし、台湾に来られる機会があったら、是非、ホテルやレストランなどでお粥を食べてみて下さい。お粥の中にサツマイモが入っていたりして、とてもおいしいですよ。それに健康とダイエットには最適の食事ですよ。台湾の諺...「イモは大粒の米、分け隔てなく人を救う。」のです。

もう一つの主食はコメです。今では三食コメです。でも、ヤングには、ハンバーガー、フライドチキン、フライドポテト、ピザなどが人気があり、外資系の外食産業花盛りです。日本のヤングとちっとも変わりありません。台湾料理の特徴は材料を決して捨てない事にあります。たとえば、豚の場合骨はスープのだしの基本的なもので、血もスープにして、豚のアブラをいためたものや、ニラを加えます。おいしくて大衆的なメニューの一つです。もちろん、皮、脳髓、内臓.....毛以外は何でも食べるのです。そのためにさまざまな料理法が発達してきたのです。その場合、できるだけ調味料を使わないで材料本来の味を引き出そうとするのが、伝統的な料理の特色なんだそうです。

東京に住んでいた当時、友達の家で台湾から来た留学生のために、ささ

やかな歓迎会をやったことがあったんです。お礼にというのでしょうか。

かの留学生君は、

「台所を借りてもいいですか」と言ってスープを作ったんです。

子供達は

「わあ、いいにおい」と言って、蓋をあけたとたん、

「きゃあ、怖い」と泣き出してしまったんです。

どうしたんだろうと思って中を見ると、なんと鶏の頭が、とさか（鶏冠）つきで胴体、足とともに入っていたのです。台湾の人にとっては当たり前の事で「これ、おいしいよ。」とって平気で食べていましたが、日本人にしてみれば、「残酷、かわいそう」と思って、なかなか箸でつまんで食べる気にはなれません。

この時は「へえ、台湾人ってすごいなあ」と思っていました、台湾に住むようになって七年、今では平気で鶏の頭が食べられるようになりました。

これもだんだん台湾人の仲間入りした証拠でしょうか。

日本と違う点は、更に台湾の人達は生野菜、生卵などの「なまもの」を食べる習慣が無いと言う事です。年配の人の中には刺身が好きな人も見られますが、刺身のそばには山盛りのワサビが置かれているのです。なまものは怖いので大量のワサビで殺菌しようと考えているからなんです。なまものを避ける原因の一つは野菜等には想像以上の農薬が加えられているからなんです。この農薬は「洗っても、焼いても、煮ても、炒めても」落ちないそうです。

あるアメリカ人の学者は

「どのくらい、農薬を与えれば人間は死なないでいられるのか、台湾人はそのモルモット替わりにさせられている。」

と言ったそうです。こんな話をきいたら、誰だって背筋がぞっと寒くなってしまいましたよね。

町の中で最も多い店は食べ物屋さんでしょう。昼御飯のとき「おいしい、安い、速い」の三拍子そろった店は“自助餐”の看板のあるところです。「自助」とはセルフサービスと言う意味です。いわゆるバイキング料理だと考えて結構です。店の入り口近くに大きな台が置かれ、その上にアルミのバットに入った料理がいろいろ並べられているのです。野菜炒め、豆腐の煮込み、焼き魚など、もう見ているだけでも台湾の家庭料理の豊富さがわかります。客は入り口にある発泡スチロールの皿に自分の食べたいものを指差せば、店の人がおたまで取って盛ってくれるのです。おかずを選び終わったら、その先のカウンターでごはんは普通盛りか大盛りかを告げて会計します。だいたい60元前後（日本円約240円）でおなかいっぱい食べられます。さらにうれしい事はスープやアイスティなどがタダで飲み放題なんです。自助餐は学生や、サラリーマン、OLに人気があります。そして、もちろん発泡スチロールの弁当箱に入れて、持ち帰りもできるのです。

この場合、台湾の人達の「持ち帰り」は徹底していて、スープもビニール袋に入れて紐でキュッと結んで持って帰るのです。もし、ごはんだけ欲しい時は同じ要領でやればいいのです。豆乳を入れたビニール袋をぶら下げて、バスに乗っているOLもいるくらい、台湾ではビニール袋が活用されているのです。日本でもこのようにやったら、新しいファッションとして注目されるかな。でも、やっぱりきれい好きな日本人にはだめかもしれませんね。

「中国人は椅子以外の四本足のものなら何でも食べる」という話を聞いたことはありませんか。この話は夜店に行けば、「ゲテモノ」料理を食べさせてくれる店がありまから、すぐに納得がいきます。

以前、高雄で姉夫婦とともに友達に誘われて犬の肉を食べたことがあります。もし店の看板がなかったり、友達が犬の肉と教えてくれないなら、私たち日本人には何の肉か当てるのはむずかしいでしょう。事実、細切れにされていて見た目はわからなかったんです。でも、会計をするとき、奥で店のマスターが犬を殺しているのを見て、

「ああ、食べた後でよかった」

と思いました。もし先にその現場を見てしまったら舌づつみをうって食べることは出来なかったでしょう。ちなみに、白い犬はまずくて食べられないので、赤か黒の犬だけ食べるんだそうです。

あなたは食べられますか。

台湾では、よく母の日とか父の日にも誕生日に、家族そろってレストランで食べる家庭が少なくありません。ぼくの妻（台湾人）の家庭も、両親が健在だった頃は、よく一席を設けて親を招待しては、楽しそうに語り合いながら食べていました。言葉の通じないぼくはただ食べることに専念していましたが、反面羨ましかったです。すでに独立した兄弟たちが、いくら親と近い所に住んでいるとは言え、親を招待して三世代いっしょに食事しているのです。日本にはだんだん失われつつあるものが台湾ではまだまだ残っているような気がします。

日本ではパーティの場合、一人いくら計算ですから、高くついてしまいます。それで親子兄弟そろって食事するのは二の足を踏むのかも知れません。台湾では、一つテーブルいくら計算なのです。だから、一つのテーブルに十人でも八人でも同じ料金なんです。結婚披露宴でも参加者の人数の頭を痛めることなく、あらかじめテーブルの数を決めておいて、あとは増やしたり減らしたりできるのでとても合理的なんです。

バスに乗る

昨今では悠悠カード（日本で言うところの交通カード、SUICA カードのようなもの）があれば小銭の準備は入らないし、また台中市内は 10 キロ以内は無料なんです。下記の記した内容は 20 年以上の前の話で隔世の感じがします。

台湾に住むようになって早くも五年経ちましたが、それ以前にも毎年のように台湾に遊びに来ていたんです。台湾での一人旅ではいろいろな経験をしました。中国語が話せないの、いつも紙と鉛筆を持って各地を回ったのです。

台湾を回る時は何と言ってもバスが便利です。本数も多いし、スピードも速いので定評があります。台北から中南部に行くときは高速ハイウェイバス国光号を利用する事をお勧めします。国光号はリクライニングシート、冷房、トイレ完備の全席指定席です。ひと昔まえは、国光号のバスガールといえば女性の憧れの職業だったそうです。厳しい試験をパスした容姿端麗な若い女性が乗っているのですから、少々ほかのバスより割高でも乗客はニコニコ顔だったとか。そして当時はおしぼりとお茶と新聞のサービスもあったのです。でも日本と同様に、クルマ社会になりマイカー族が増え、かつ人件費の高騰などの理由で、今では全部ワンマンバスになってしまい、バスガールは姿を消してしまったのです。

長距離バスの国光号は公営ですが、市内バスは民営バスが圧倒的。台中市内には二つの会社の路線バスが走っています。日本のバスと最も違う点は、台湾では次の停留所のアナンスがないのと、釣り銭がもらえない事です。当初はこの事を知らなかったのです。

台北に行った時、久しぶりに友人に会おうと思って彼に電話をかけたんです。すると、かれの返事は「そのホテルの前から 20 番のバスに乗って 15 分位したら、大きな教会があるから、そこで降りて待ってて。迎えに行くから。」と言う答えだったのです。

バスの料金は冷房車は当時 8 円で日本に比べたらただみたいな安さ。細かいお金を持ち合わせてなかったので 100 元札を料金箱に入れたの

です。釣り銭をもらおうと、運転手さんに手を差し延ばすと、かれは知らん顔。アタマに来て日本語で「早く、釣り銭のお金くれよ。」と怒鳴ったのです。するとかれはたどたどしい日本語でこう答えたのです。

「お客さん、日本人？ 台湾のバス、釣り銭がない。バスに乗る時、必ず小さいお金いるあるよ。」
「何がいるあるだ。このドロボーバスめが。」
と思っても、安いバスのはずが無知のために高くついてしまったのです。

そしてその後もイライラが続いたのです。自分の降りる所がわからないので、出発して10分過ぎてからは、バスが止まるたびに目標の十字架が見えるかどうかばかり気になってのんびりと異国の風情を観察する余裕などありません。

「困ったなあ、全然教会なんてないぞ。」
と思っているうちに、バスはどんどん停留所を通過して行くのです。バスは乗客が下車の合図をしなかったり、停留所に客の姿が見えない時は止まらないのは当然ですが、台湾ではバス停のアナウンスがないのです。バスに乗ってもう20分経過。

「もし右も左も分らない所で迷子みたいになったらどうしよう。」
なんて思っていると、前方に友達の姿が見えたのです。

「ああ、よかったあ。助かったあ。」
と、言葉を発しようとする目の前に教会があったのです。
そして教会の時計台の針を見て
「あっ、もう10時か。」と叫んだのでした。

住まい

台湾も以前は大家族制度で、これに即した三合院と呼ばれる伝統的な建築様式がいまなお、農村地帯に見られます。建物の周囲は防風と食用を兼ねて竹や檳榔が植えてあり、建物はコの字型をしており、建物の前は穀類を干す広場になっているのです。大廳と呼ばれる大広間には神様や祖先を祭る祭壇が設けられ、壁には書画などが掛けられています。大廳は冠婚葬祭の儀式を行う所でもあり、来客を迎える場所なのです。大廳の左手は両親の部屋で、以下年齢の順に従って部屋が決められるのです。こうした建て方は家族が増えても簡単に建て増しできて実に合理的ですね。

はじめて台湾に来た人の強烈な印象として残るものは交通事情のほかに台湾特有の住居の造り方でしょう。日本と違って一戸建ての独立した家はあまり見られないからです。その背景には歴史的要因と立地的な要因があります。大部分の家屋はお互いに密着し、隣の家とは共有の壁になっており、通りに面した商店街はどの店も、タテ長で間口が狭く、店の前には「亭子脚」（二階部分からは歩道に張り出してアーケードのようにする）が歩道を作っているのです。亭子脚は法律で定められた造り方で、強い陽射しが入るのを防ぎ、かつ雨やどりの役割を持っているのです。バイクで走っている時、急に雨が降ってきたときはここで雨合羽を着たり、雨宿りしたりできて台湾の風土に本当にピッタリなんです。ただ、この歩道の高さが各店によってマチマチなのと、また歩道に商品を並べた物売りの人がいたり、駐車場替わりにクルマやオートバイなどが止められていたりして、慣れない外国人にとって実に歩きにくいのがキズです。

ところで、どの家も最上階にはたいてい祭壇が設けられています。日本なら結婚式は神社やお寺などするのが常識ですが、台湾ではかならずと言っていいほどこの祭壇のある部屋で儀式が行われるのです。

社会の形態の変化に応じて、大家族が小家族になり、町では伝統的な中国式建築がだんだん姿を消し、人々はマンションなどの集合住宅に住むようになりました。ぼくが台湾に住み始めた頃（88年）まではエレベータなしの五階建てが多かったんですが、そのあとは高層化が進み、中庭・噴水・プール付きといった豪華マンションやワンルームマンションも数多くみられます。おもしろい事に同じマンションに住んでいても、みんな住所が違うのです。台湾の住居表示には一定のルールがあって、大通りは「路」、

以下小さい道になるにつれて街、巷、弄となり、道路の右側が偶数なら左側は奇数番号なんです。たとえば住所が大和路 342 巷 20 号となっていたら、通りの名である大和路 340 号の建物を曲がった路地は 342 巷になるのです。そして順番に番号を追っていけば、はじめての所でも容易に目的地が捜せるのです。

ところで、台湾のマンションは日本には異なった特徴があります。まず、各家庭のドアのところには表札がなく、あるのは住所を示した番号だけ。そしてある家はドアが二重になっており、部屋に入って中から外を見ると、窓と言う窓には鉄格子がしてあるのです。これらはいずれも防犯上の理由からなんです、いかに泥棒、強盗対策に苦慮しているかわかるでしょう。日本人はウサギ小屋に住んでいると皮肉を言われましたが、台湾の人達は、この鉄格子のせいで「まるで牢獄に住んでいるみたいだ」と、口の悪い外国人に言われているとか。でも、台湾の人達は日本人以上に財産は自分で守らなければならないのです。警察はあてにできないんだそうです。

*まあ、それはそれとして、ぼくはこの徹底した防犯対策が逆に火災の時にアダになる両刃の剣であることに気が付いているのか心配なのです。

ほかにも違う点が三つあります。一つは玄関のドアが内開き、即ち入る時はドアを押すようにして入るのです。二つ目はバス、トイレがいっしょになっていることです。日本では風呂場とお手洗いが分かれているので、初めての方はきつととまどうことでしょう。なかなか慣れないで困っているという駐在員も少なくありません。

最後に、台湾では分譲マンションの場合、最上階を買った人がその上空を自由に使える権利があるのです。だから、最上階の戸数が四戸なら小屋が四つ、それぞれの住まいのちょうど真上に、物置に使ったり書斎に使ったり実用に即して建てられるのです。大きなマンションやビルの屋上には、色、形、大きさの異なる幾つかの小屋があったり、大きな立て看板があったりして、景観よりも実用本位の考え方が浸透しているのがよくわかります。

台湾の学校

台湾の学校は日本と同じ六三三制で九年間の義務教育です。しかし、新学期はアメリカと同様九月から始まり、卒業は6月なんです。だから、大学や高校の入学試験は7月に行われるのです。

台湾では普通高校は「高級中学」、職業高校は「高級職校」、夜間高校は「補校」とそれぞれ呼ばれています。じゃ、中学校はどう呼ばれているかって。中級？ 初級？ いいえ、答えは「国民中学」でした。

高校の職員室を訪れてみると「教官」と呼ばれている人達があります。台湾の高校の先生は単に自分の専門科目を教えるのみで、生活面の指導は教官の仕事なのです。すなわち登校・下校時の交通整理に始まって、校内外でのいろいろなトラブル処理まで彼らの担当なのです。それから、台湾の高校では「軍事訓練」の科目があり、この科目も教官の受け持ちなのです。日本は徴兵制度がありませんが、台湾では満19歳から男子全員兵役の義務があるのです。だから、高校生になると、男女の区別なく軍事に必要な予備知識を勉強し、1年に1回女子高校生にも実弾射撃訓練が授業の一貫として行われているのです。そして、大学・高専在學生は卒業後にかかわらず服役しなければならないのです。塾で「日本は兵役の義務はないよ。」と教えてあげたら、大部分の女の子曰く「あっ、わかった。それで日本の若い男性はたくましくないのね。」だって。彼女たちに言わせると、兵役前と後では男の「質」が全然違うのだそうです。

ぼくが以前教壇に立っていた学校に昼夜二部制の「新民商工」(注)と言う商業科、電算科、貿易科、機械科、外文科などからなる職業高校があります。この高校に外文科ができたのは90年。当時6名の外国人教師がいました。日本語科の学生は一クラス55人程度の編成で一学年二クラスあります。日本語会話は一つのクラスが二つに分けられ、二人の先生から教えてもらうのです。授業は、午前は50分、午後は45分授業で、夜間部は40分授業になっているのです。台湾での日本語の教材は大部分が日本で発行されたテキストなどをコピーした本が使われています。

(注) 最近「新民高中」と校名が変更になり、英語科と音楽科からなる中学部も新設されました。現在台中日本人学校と姉妹校でもあり、この学校で学んでいる日本人学校出身の生徒もいます。

生徒は朝7時半ごろまでに登校し、朝礼が毎朝校庭で行われます。校庭は口の字型の校舎に囲まれており、グラウンドを兼ねた中庭の役目を果たしているのです。校舎の周囲には南国の学校特有の椰子の木が植えられており、また花壇にはいろいろな花が一年中咲き乱れ、環境美化に努めているのがよく分かります。

朝礼の時、全校生を見渡すとメガネをかけている生徒が多いのに驚かされます。台湾ではなんと高校生の70%強が近視で、大学生になるとこれが90%に達するのだそうです。統計によると小学生35%、中学生66%職業科の高校生74%普通科の高校生86%という風にだんだん数字がエスカレートしているのだそうです。試験地獄の後遺症なのかもしれませんが、今の子供たちは物質に恵まれている反面かわいそうな気がします。

さて、授業は8時15分から始まります。外文科の場合、午前中はたいてい日本語、英語の科目が割り当てられているのです。授業は級長の「起立、礼。」の掛け声で始まり、
「先生、ありがとうございます。」
と言うあいさつで授業が終わるのです。日本語の授業の時はもちろん「先生、おはようございます」と言ってから着席しますよ。

ところで、昼休み時間はちょっと日本の学校と違った光景が見られます。それは、食事の済んだのち昼寝の時間があることです。この習慣は子供の時からずっと続いているのです。だから、教室の電気を消して机にうつぶせになって全員昼寝をします。台湾は一年の半分が夏の天気。暑さで体力が消耗しないようにしているのです。

午後からの授業も午前と同じ4時間。クラブ活動の時間は一週間に一回正規の時間割りの中に組み込まれています。下校時間になると補習授業のある人を除いて一斉に生徒は帰宅の途につき、放課後の校内はひっそりと静まり返ります。それは校舎にとって、6時ごろからこんどは夜間部の生徒の登校してくるまでの、ほんの2時間たらずの安らぎの時間なのです。

台湾では中学卒業後、夜間部に通学する生徒が多く、企業の方でも積極的に彼らを採用し支援しているのです。教室の中には若い人に混じって中高年

者や家庭主婦の人の姿も見受けられ、まるで親子で勉強しているような感じで、生徒のほうも年長者に対し「阿姨（おばさんの意味）」等と呼んでいます。そして、阿姨と呼ばれた制服姿の人達もしばし家庭の事を忘れて楽しそうに、かつ一般の生徒より真剣に勉学に取り組んでいるようです。どこに住んでいても、いつの時代でも年齢に関係なく向学心のある人の目の輝きはちがいますね。そういえば、台湾では放送大学や夜学部で学んでいる社会人が多く見られ、短大・大学側でも社会人に対し、より積極的に門戸を開いているような気がします。学校とは「学ぼうとする者は拒まず、年齢、性別、国籍に関係なく」開放されているのが望ましいと思います。その点、台湾は日本より先進国かもしれませんね。



言葉

最初に問題です。「現在、台湾のテレビニュースはいくつの言葉（何語）で放送されているでしょうか？」

日本人でこの問題を正確に回答できる人はかなりの台湾通と言えるでしょう。正解は中国語、台湾語、客家語の3つなんです。

これは台湾の特殊事情を表わしています。一昔前までは台湾語は禁止されていたのです。公的な場所では中国語で話さなければならなかったんです。それが最近の民主化政策により、だんだんと緩和されるにつれ上記のような結果になったのです。

*ちなみに、台湾では日本時代の国語は日本語でしたが、1945年以降中国大陸からやってきた国民党政権になってからは国語は中国語（北京語）となって台湾人は新たな国語（ゴォーイ）を学ばなければならなくなったのです。

台湾に来る時は団体ツアーでなく、個人旅行をお薦めします。それは台湾の人達の生活に身近に接する機会が多いからです。ある人は「外国人と友達になれる方法はその国の人達が食べるものを一緒に食べることだ。」と言っています。台湾はまさにグルメの人にぴったりです。一口に中国料理、台湾料理といっても種類が多いんです。そして、食べながら彼らの話している言葉に耳を傾けてみて下さい。こんなに狭い台湾でも所によって言葉が違うのです。

台北は政治、経済の中心ですから、もちろん国語。そして、新竹県・苗栗県などの中部に住む客家人と呼ばれている人達は客家語で、台中、高雄では台湾語が町のなかでも、会社のなかでも広く使われているのです。

台湾に住み始めた頃は、国語と台湾語の区別がつかず、同じように聞こえたんです。そのうち、ある日本人の先輩がこう教えてくれたんです。

「若い人同士の会話は国語、中高年者の会話は台湾語が多いよ。」

歴史的・時代的な背景により、台湾では出身や世代によってそれぞれ話す言葉が違うのです。まず、台湾生まれの65歳以上の日本教育を受けた人達はほとんど台湾語で話し、日本語の話せる人もおおぜいいます。年配の人同士で話す時は日本語でという人も目立ちます。しかし終戦後、外省人と呼ばれ

ている大陸からやって来た人達は中国語を使い、台湾語の話せる人は少ないんです。終戦後は中国語教育が変わったために戦後生まれの若い人達はほとんど国語で話し、中高年層は両方話せますが、国語より台湾語のほうが素直に自分の感情が表現できると言います。

*戦前から台湾に住んでいる人達は自らを「本省人」、戦後大陸から来た人達を「外省人」と区別してきました。しかし、戦後半世紀が過ぎた現在、この言葉は死語になりつつあります。台湾生まれの人達が総人口の大部分を占めるようになってきたのですから。

同様に、山地人（戦前は高砂族）と呼ばれる原住民の人達も世代により違うのです。原住民は9つの部族に分かれ、それぞれの部族によって言葉が違いますが、自分の部族の言葉を話せるのはお年寄りの人だけで、若者は国語なのです。それは山地人の言葉は話し言葉だけで文字がないことも原因の一つかもしれません。そして、面白い事には、かれらの共通語は日本語なんだそうです。それは、台湾がかって日本に統治されて、徹底した日本語教育が行われていたからなんです。考えてみると、昔の日本人は、首を狩る習慣のありかつ言葉の通じない原住民の人達を相手に、日本語を教えたのですから、想像できないくらい大変だったと思います。

そんな訳で今、台湾では、こういう人達が見られるのです。一つは老人
大学で国語を勉強しているお年寄りの人達、次は「私も台湾の米を食べて大きくなった台湾人です。」と言って台湾語を学んでいる外省人の人達。
そして「これからの社会は英語ができないとだめよ。」と言って幼稚園児に英語を習わせる母親達や日本語が全然話せないのにカラオケで日本の歌を上手に歌っている人達。だんだん消えていく原住民の言葉を残そうと努力している人達。そして最後は、ぼくのように365日ずっと日本語だけで暮らしている人もいるのです。ああ、台湾はなんてすごい所なんでしょう。

幼稚園

毎朝八時十五分前後になると幼稚園の送迎バスが住んでいるマンションの玄関前にやって来ます。ある日のこと。こどもがうれしそうに話しました。「パパ、ぼくが新しい運転手さんに大きな声で『おじさん、お早う』と言うと、おじさんも『祥一君、お早う』と日本語で言ってくれたんだよ。」

ぼくの子供は、今年九月に五歳になる男の子です。幼稚園の前で初めて制服を着て写真を撮ってあげたのは去年の八月でした。周りは住宅地に囲まれた、四階建の大きな双語（二か国語）幼稚園です。ここの幼稚園では普通の台湾班（台湾人のクラスで週一回英語を教える）と日本語班（週一回日本語を教えるクラス）以外に、台中市内で唯一「日僑班」と呼ばれているクラスがあるのです。

*国際化、情報化社会を反映して、台湾での私立幼稚園はここ数年の間に、英語やコンピューターレッスンがある所が増えています。日本に負けない立派な施設のある幼稚園が多いのです。気になる費用の面は大学並み。双語幼稚園の場合、どこでも月謝は月六千元前後。そのほかに、バス代千元、学期毎に納入金を払うので月平均一万元（日本円四万円程度）に達し、台湾でも子供の教育費にはお金がかかるのです。



日僑班は二クラス編成で、合わせて三十五人ぐらい。クラスは年齢によって、大班（年長組）と中小班（年中・年小組）の二つに分けられています。クラスのほとんどは日本人ですが、日本で生まれ育った台湾人もいます。また、ぼくの子供のように台湾で生まれ育った子供も少なくありません。親が日本人、台湾人、アメリカ人だったりや、また家庭環境の違いによって、教室の中での子供達の話す言葉は違っても、授業はすべて日本語で行われているのです。とは言っても、先生は日本人ではなく、みんな台湾人の先生なんです。一クラスの中に、担任とアシスタントの先生が二人います。クラス受け持ちの先生は、長い間日本に住んでいた先生や家族が日本に住んでいるとかと言った先生で、話し方も考え方も日本人とソックリなんです。幼稚園の日僑班の教室の中だけは日本の幼稚園となんら変わりなく、教材を含めてすべて日本式のやり方で運営されているのです。

だから、秋の運動会も日僑班はほかのクラスと違う日にするのです。日本の運動会のように、園児たちの歌や踊りのあと親子リレーや借り物競争、綱引き、クス玉割りなどがあります。ただ、あいさつの時やアナンスの声、声援のかけ声は日本語と中国語の二か国語が万国旗の下飛び交うのです。園長先生が日本語で開会のあいさつをすると、父母の会の日本人のお母さんが中国語であいさつをしてお互いに拍手喝采を浴びるなど、台湾ならではの光景。この日は半日だけのミニ運動会でしたが、親子にとって楽しい充実した一日になったのです。

普通のクラスは卒園式は七月ですが、日僑班だけは地元にある日本人学校にあわせて、三月なんです。それで、先日の卒園式の時は、最初から最後まで日本語で進められたので、来賓で見えられた方は「まるで日本の卒業式に出たみたいだった。」と感想を漏らしていたそうです。

また一般の幼稚園は園児に昼寝をさせるのですが、日本人はその習慣がないので、日僑班は午後二時までなんです。だから、ぼくたちは子供を近くに住んでいる妻のお姉さんの家に預かってもらっています。

子供曰く「ぼくの幼稚園二つあるんだぞ、いいだろ。」だって。



(長男が幼稚園児の頃の懐かしい写真～園内での餅つき)

(追記) 忘れられない出来事

921 大地震で台中日本人学校の再建に伴う移転をどうするか、仮校舎をどうするか等の問題は当時の江原校長の頭を痛めました。幸いなことにエンゼル幼稚園が手を差し伸べてくれたのです。というのも、この幼稚園の日本人卒業生が台中日本人学校に入学している縁があり、学校が再建するまでの間、園側の御好意で一部施設を借りることができたからです。一学年ごとの教室とその上校長室までが提供されたのです。学校の入口になる所には校名の横額のほか周りの飾りつけも幼稚園の先生方の奉仕であり、移転の日には幼稚園園児全員が並んで拍手してくれたとか。こんな話を聞くと本当に台湾の人たちは心暖かいんだなーと思うのです。「雪中送炭」(困っている人を助ける)の精神があるんです。ぼくたちも見習わなければと思います。



第二章 台湾の年中行事としきたり

春節（台湾の旧正月）

今台湾は年の暮れ。街には朱色の春聯や剪紙やお年玉用の紅封筒を売る屋台があちこちで見られます。そして魚（余裕）、馬蹄銀（蓄財）などのプラスチック製の正月の縁起物が店先に並べられ、街中は正月を迎える準備でおおわらわ。

そして各家庭では日本と同様に家族総出で大掃除をして、大掃除の終えた家庭の玄関や部屋の壁に、赤い紙に「春」の字をさかさまにして貼るのです。

どうしてわざと逆さまに貼るのか？ って。それにはわけがあるんです。それは、春が「来た」の意味の「到」と「さかさま」の意味の「倒」の発音が同じからで、逆さまにしないと、春が来ないからなんですよ。

除夕（大晦日の意味）には都会で一人暮らししている人も家に帰り、夜は家族団欒で食卓を囲むのです。そして食事の済んだ後、子供たちには、待ちに待った紅包（お年玉）が渡されるのです。

そして、午前〇時になると除夜の鐘ならぬ「爆竹」の音が町中にパンパンと鳴り響くのです。もちろん新年を待ち切れない人は〇時前からもう鳴らしているのです。そして、この音は一時間あまりも鳴り響くのですから、にぎやかというよりうるさいと言ったほうが適切かもしれません。日本の静かな年明けとは対照的です。でも、これで驚いてはいけません。

なんと元旦の早朝も自分の家にある神様、仏様に礼拝した後、また爆竹を鳴らすのですから たまりません。一番の被害者は赤ちゃんでしょう。熟睡している時、突然の爆竹の音で起こされ、そのあとは怖くて一晩中眠れないからです。

（注：昨今の台湾は環境問題で爆竹が制限され、だいぶ静かになってきて、昔を知っている人には寂しすぎるようです。）

元旦の朝は人と会った時に、お互いに「コンシィ、コンシィ」と新年のあいさつを交わします。また日本と同じ様に、寺廟は初詣客でごったがえします。ここでは、誰もが赤くて長い中国式線香を両手で持って参拝しています。もしチャンスがあれば、台湾（台中）に来た時に、現地の人達のまねをしながら一緒にお参りして

みませんか。ある人から「台湾でも餅を食べるんですか？」と聞かれました。

皆さんはどう思いますか？

答えは「YES」です。でも台湾のお餅はちょっと日本と違って、お餅のなかに具が入っていて味つきなんですよ。

正月二日は「回娘家」つまり既婚女性の里帰りの日で、子供と夫婦そろって妻の実家で ごちそうのもてなしを受けるのです。しかし、最近ではこの習慣もだいぶ薄らいできた ような感じがします。

*中国語の「娘」は日本語のむすめの意味ではなく母の意味です。そして面白いのは自分の妻は「老婆」なんです。若いのに「老婆」だって？
冗談じゃないよね。まったく。

三日目は古い習慣では外出禁止の日になっていますが、新人類にとっては関係なしです。「もう、じっとしてられない」と言うヤングで、年中無休の映画館やゲームセンターなどは大にぎわい。また、各地の行楽地や公園なども親子連れや若いカップルで黒山の人だかり。だから、どこへ行っても、人、人、人、車、車、車だらけ。台湾も日本と同じなんですよ。やっぱり、ぼくのように寝正月が一番賢明のようです。

四日は天にもどった「かまど」の神様が下界にお帰りになる接神の日で、五日が「松明」になり、各商店はごちそうを作って、爆竹を鳴らしながら店開きするのです。もっとも、この日以前から営業している店も新年最初の店開きには、必ず爆竹を鳴らすのです。

だから、正月は毎日爆竹が鳴っているのです。爆竹はまさに春節の代名詞と言っても過言ではありません。うるさくてたまらない音も台湾の人達にとっては景気のいい音に聞こえるんだそうですよ。

◆旧暦の1月15日の今日は、いわば正月の第2ラウンドとも言える、一年ではじめての満月の夜を迎える日の「元宵節」です。中国人は、その晩、天の精霊が空を飛び回っているのをみることができると信じて来ました。雲や霧が出ていても、精霊を見つけやすいように、人々はこの夜に松明を燃やしたのが始まりだそうです。

時が経るに従い、松明がランタン（提灯）にとって代わるようになり、一昔前までは、子供たちが手作りの提灯をさげて町を練り歩いていたそうです。

1990年から「台湾燈節（ランタン祭り）」が台北を中心に開催されてきましたが、今年会場を台中に移し今年8日より始まりました。皆さんは青森の「ねぶた祭り」をご存じですか。地元の郷土色を生かして伝統文化に現代の科学技術を取り入れた一大イベントと考えてください。今年の干支の動物である羊などを形どったさまざま

なランタンが飾られ、水面に浮かんだ二つの三角形の屋根の建物がレーザー光線で浮かび上がり、音楽にあわせて噴水がダンスし始めたのです。この日はあいにくの小雨模様でしたが台中公園での OPEN はまさに幻想的な気分が味わえました。

ここの台中公園では 23 日まで祭りを行って、また今夜から「経国大道」と呼ばれている別の会場でもランタン祭りが始まります。こちらの会場では今日と明日は北海道から来る「YOSAKOI ソーラン」のチームが踊りを市民に披露することになっています。

平安を祈るランタン祭りは、各地で特色のある行事が行われますが、台北県の平溪で行われているランタン祭りは「放天燈」として特に有名です。一度この祭りを見たらきっとランタンの虜になりますよ。とっぷりと日が暮れた中、手に手に提灯（電池仕掛け）を持った子供たちや大人たちが広場に集まってくるのです。直径 1m はある紙製のミニ気球状の表に、祈りの文句と自分の名前を書き、気球の下部に括り付けられた紙束に火をつけると、熱気で折り畳まれていた気球が大きく膨らんでいって、あっという間に空に浮き、見る見る暗い夜空に吸い込まれ小さくなっていくのです。後から後から、絶えることなく人々の祈りを乗せた天燈が夜空に舞い上がりたくさんの煌く星になる様は、見上げる人たちの胸を熱くしないわけにはいきません。



このほか、春節を締めくくる「燈節」が台湾各地で行われているのです。台湾では全ての行事に、謂れや由来・昔話があり、興味の湧く話ばかりです。

自然の中で生かされていることに感謝しつつ、自然と共に心豊かに平和に生きようとした先人の知恵や願いが溢れているのです。日本でもかつては七夕やお月見などの行事などがありましたが、いまではほとんど生活の中から失われているようです。こうした行事の伝統を受け継ぎ大切にすることは即ち、先人の心を受け継ぐことに等しいと思います。時代がどのように変わろうとも人間の気持ちは変わらないのではないのでしょうか。同じ文化の流れを汲む日本では廃れて行くものばかりで、それは心の荒廃をも意味するのかもしれませんがね。文明が進み、便利で合理的なものもてはやされる中で尚、心の拠り所を失わない台湾の人々の方が「日本人よりもはるかに心が豊かで幸せな生き方をしているなあ。」と知っているのは、ぼくだけでしょうか。

ゴールデンウィーク

「台湾にもゴールデンウィークがあるよ。」と言ったら、日本の友人は「まさか。あるわけないだろ?」と問い返してきました。

日本のゴールデンウィークは四月末から五月始めにかけての一週間を指しますが、台湾では一か月早く、三月末から四月始めに日曜日をはさんで、三月二十九日が青年節、四月四日は婦幼節、五日は清明節と祝祭日が続くのでこの期間を普通「春休み」と呼んでいるのです。

(実はゴールデンウィークはぼくが勝手に命名しただけ)

青年節は革命先烈記念日とも言い、辛亥革命（一九一一年）の志士七十二人が革命ののろしをあげた日なんです。ちなみに、台湾ではこの翌年を「民国元年」と定めているのです。だから、一九八九年生まれのぼくの子供は台湾の年号に直すと民国七十八年になるのです。じゃ、一九一一年生まれの人はどうなるのかって？

その答えはいたって簡単「民国前一年」なんですから。

婦幼節は最近制定された祭日で、三月八日の国際婦人デーと四月四日の児童節がいっしょになったものです。もともと児童節は祭日ではなく、三月八日は女性だけが公務員も一般企業も休みだったんです。

五日の清明節は民族掃墓節とも言われ、祖先のお墓参りの日です。

墓前に鶏、果物、花などを供えて、線香を焚き紙銭を焼いて祖先を供養するのです。中国人にとっての理想の墓地、すなわち「風水」のよい墓地は、日当たりのいい、水分の多い場所です。それで、自然と高台や海の見える所に墓地が集まっています。墓参りといえば、ちょっとした家族旅行のようです。親はご先祖様の墓参りという義務と責任を果たし、子供にとっては、ピクニック気分を外を走り回り、これぞまさしく一石二鳥というわけ。しかし、風の強い時は紙銭の燃えかすが舞い上がり山火事になることもあるそうですから、気をつけてください。墓参りに来られた善男善女のみなさん。

この期間は学校が春休みになるので、各地の行楽地はどこも「人山人海」（黒山の人だかりの意味）です。また友人同士や親子で海外脱出と言う人達も少なくありません。日本は年間一千万人を越える

海外渡航者がいると言っていますが、人口比率で言ったら台湾は負けません。なにしろ四百万人以上の人が出国しているので、五人に一人は外国に行っている計算になるのです。これは一九八七年に大陸に住んでいる親族訪問を解禁したことや、観光自由化の政策も寄与していますが、なによりも誰もが豊かになってきた証しと言えるでしょう。事実、妻の家族・親戚や日本語クラスで五人集まれば必ずその中の一人、本人または身内の人が海外旅行経験者なのです。台湾のゴールデンウィークも、日本同様暑くなく寒くなく、また日本の花見のシーズンにあたるので、ぼくたちは休みを利用して一時帰国したことがあります。前の年生まれた子供を両親や兄弟に顔見せするため、それからついでに大阪の花博を妻の母親らとともに見に行ったのです。両方の親に孝行できるのも、親が健在であればこそ。今になって考えればあの時の判断は正しかったと思います。ここ数年の間にあいついで妻の両親が他界し、ぼくの父も九二歳の高齢でこの春亡くなくなってしまったからです。

人生をゴールデンウィークならぬ、「ゴールデンライフ」とするために、日々努力し毎日を黄金の日々としていきたいものです。

端午節

五月五日の端午の節句と言えば、以前はちまきを食べたものです。童謡「せいくらべ」の中に「ちまき食べ食べ.....」と唄われていても、今では、もうちまきを食べる家庭は本当に少なくなってしまいました。でも、ここ台湾では端午節になると、どの家庭でもちまきを作って食べるのです。台湾のちまきは日本と違って、味付けしたもち米や豚肉、椎茸などを笹の葉に包んで蒸すのです。だから、日本のちまきよりも大きくてボリュームがあって、味もなかなかおいしいですよ。作った人の味が出ていて、これが「我が家のおふくろの味だ」と自己主張しているみたいなんです。

台湾のお土産と言えば、「紹興酒」や「ウーロン茶」、「カラスミ」などを思い浮かべる人が多いと思いますが、ぼくはこの台湾の「ちまき」をお勧めします。朝の市場やスーパーなどで一年中売られていますので、まず自分がひとつ買って、食べて見ておいしかった時はお土産にどうぞ。帰国してから、ちまきを食べながら台湾のみやげ話に花が咲きますよ。

ところで、どうして端午の節句にちまきを食べるようになったか知っていますか。戦国時代、楚の国に「屈原」という偉大な政治家がいました。愛国者でもあった彼は秦の国の侵略から守るため一生懸命努力しました。しかし、国王は彼の忠告を聞くどころか、逆に彼を追放してしまったのです。そして彼は国を憂るあまり五月五日にベキラというところで河に身を投げ自殺したのです。当時の人々は屈原の愛国精神に深い感動を覚え、小船に乗って遺体を探し求めましたが見付かりませんでした。それで、魚に食べられてしまうのは忍びないと、笹の葉にもち米を包んで川へ投げ入れたのです。こうしてこの日にちまきを食べる習慣が時代は変われど、今日まで伝わっているのです。

台湾の端午節は「鯉のぼり」こそありませんが、主要な中国伝統行事だけあって、盛大な行事があります。それは各地で行われるドラゴンボートレースです。台中の近くでは「鹿港」という所が有名です。長崎でも毎年行われるので見たことがあると言う人も多いと思いますが、へさきに竜の首を飾りつけた小舟（竜舟と言う）のボートレースなんです。

端午節の当日、鹿港の町は親子連れや観光客で大変にぎわいます。竜舟に遠くからでも識別ができるように色とりどりの旗を立て、竜舟の先頭の方は太鼓をたたきながら味方の選手の士気を鼓舞し、選手は栄冠を目指し必死に漕ぐのです。台湾の端午節は旧暦の五月五日ですから、もう真夏の陽射し。レース中は見物客も選手も文字通り手に汗を握っています。もし見る機会があったら、帽子や日傘、水筒を忘れないで下さい。でも、一番いい方法を教えましょう。それは冷房のきいた部屋でちまきを食べながら、テレビでボートレースを観戦することです。暑さや人込みの嫌いな人、出不精な人には最適でしょう？

またボートレースが終わったら、是非鹿港の町を歩いてみて下さい。ここは歴史の古い町ですから、中国式の伝統的な建物が見られ、中でも「台湾の紫禁城」と称されている龍山寺には必ず足を運んでおく所の一つですよ。そして、あの世で使うお金「紙銭」に興味のある人は、この町には「冥途の造幣局」もたくさんありますから、ついでに参観してみたらどうですか。何でも台湾で使われる紙銭の半数以上はここで供給されているのだそうです。

それから歴史の好きな人は民俗博物館がありますから、お忘れなく。

プレゼント

(七夕)

日本ではバレンタインデーの日に、自分の恋人にプレゼントをあげる習慣がありますが、台湾ではまだそれほどこの日は盛んではありません。やっぱり台湾では七月七日の七夕の日です。どうしてかって？ それは、七夕と言えば織姫と牽牛を知っているでしょう。

そうです。だから、この日七夕のことを「情人節」(恋人の日)と言い、正真正銘の中国伝統の恋人の日なんです。欧米の国をすぐまねする国とは違うでしょう。

日本では七夕と言うと、笹の葉に願いごとを書いた短冊を思い浮かべますが、台湾では恋人にプレゼントをあげる日なんです。男性から女性、女性から男性いずれもかまいません。一番人気があるのは、もちろんチョコレートです。

メンツを重んずる人の中には、恋人がいないにもかかわらず、自分で買ったのに「これ、かのじょからもらったんだ」と他人にみせびらかす人もいるそうですが、信じられますか？ たぶん、誰からも義理チョコさえ全然もらえなかった人なら、こんなことをする人の気持ちがわかるでしょう。

*中国古来の伝統行事はすべて旧暦に基づいて行われます。そのため、新聞の日付けにも旧暦の日付けが併記されているのです。

(父の日)

一昔前までは、亭主関白とか言われるほど、父親は絶対的存在でした。しかし、今では父の存在感が薄らぎ、母の日に比べても父の日は日陰的存在で、あまり重視されていません。こうした原因は父の日が六月の第三日曜日なんてなんら根拠のない日を誰かが決めているからです。

その点、台湾では父親をパパとアメリカ式に呼んでいるため、パパ即ち八八で八月八日なんです。どうです。理にかなっているでしょう。日本だったら、さしずめお父さんだから十三(とうさん)で、十月三日にすれば誰も覚えやすくていいと思うのですが.....。

台湾ではちょうどこの時期は「鬼月」と言われている旧暦の七月で、結婚などの祝いごと、遠くへ旅行、引っ越しなどはしてはいけない風習があるので一般的に景気が低迷する時期なんです。それで商店、デパート側は父の日を最大限に利用できることと、誰もが覚えやすい日との思惑が一致しているのです。父の日を目の前に控えた日曜日は、紳士用品売り場は家族連れの客で大にぎわい。お父さんの肩に服をあてている姿も見られて、日本人のお父さんが見たら、羨ましくて歯ぎしりする人もいるかも知れませんね。

*ちなみに、ぼくが婚約したのも1988年8月8日のこの日なんです。どうです。覚えやすいでしょう。結婚話がパツパツと決まったからなんです。

(贈り物あれこれ)

誕生日、入学祝い、新築祝いなどで一番頭を痛めるのが何を相手にあげたらいいかということでしょう。台湾では、昔から誕生日祝いにトンソク(豚の足)を贈る習慣があります。誕生日にトンソクを食べる理由は、足に関係があるからです。年をとると衰える所と言えば、目と歯と足でしょう。ちょっと階段を上っただけで息切れするのは足が弱くなった証拠。それで、足の衰えをおさえるために猪脚を食べるわけなんです。

あのブクブク太った体を支えている豚の足にあやかり、長寿を願うのです。もっとも、台湾では50メートル先の店にお使いに行く時でさえオートバイを利用しているのですから、年に関係なく足の弱い人が多いのです。だから、お年寄りに限らず若い人も中年のおじさんもトンソクを食べなければなりません。いつもクルマや電車、エレベーターばかり乗っている皆さんも、トンソクを食べたほうがいいかもしれませんよ。台湾料理の店や横浜の中華街などに行った時は忘れないで注文して下さい。だあれ? 豚のように太るのはいやだって言っているのは。

日本では、入学祝いや新築祝いなどで時計を贈る人が多いですが、ここ台湾では時計は不吉なものとされ、嫌われます。それは、中国語での「送鐘」(時計を送る)と「送終」(死に際を見取る)の発音が同じになるからです。

台湾ではお祝いやお礼を品物で受け渡しすることは比較的少なく、たいていご祝儀を包みます。そして、その際の金額は800元・1200元・2000元というふうに必ず偶数にするのです。でも、四は死に通じるので絶対にさげなければなりません。

ある日、日本語の授業の時に結婚のご祝儀袋を見せたら笑われてしまいました。というのは、日本のものは、(縁は赤く染めてありますが)白かったからです。台湾では白は「悲しみ・不吉」を表わし、紅包と呼ばれるめでたい「赤」い封

筒でなければならないのです。

でも、旧正月前に生徒達にお年玉袋をプレゼントしたら大変喜ばれたのです。日本の子供向けのお年玉袋は小さくてかわいいし漫画や絵などがあってもらって楽しいからなんだそうです。それにひきかえ台湾のは赤一色でつまらないからだって。

鬼月

台湾では聞いただけでも身震いしそうな「鬼月」と呼ばれる月があります。旧暦の七月一日になると地獄の門が開かれ鬼がこの世に降りて来て、一ヶ月間人間に悪さをするから、この鬼月の間は、引っ越しや出国やめでたい結婚式などは古い習慣ではしてはいけないとされているのです。

鬼月の最初と最後の日は、どの商店の店先でもテーブルに供え物を並べ、線香を焚いて、道路で紙銭を燃やす光景がみられるのです。

日本のお盆は祖先を祭りますが、台湾では祖先以外にも「好兄弟」とも呼ばれる鬼魂を祭るのです。鬼魂には夭折者・未婚者・非親族者・横死者の霊が入り、かつ生前に悪行をなした者も含まれるのです。供養する人を持たず、さまよい行き処のない鬼魂を祭り、祟りを避けるのです。

紙銭を燃やすのは、火で明るくし鬼を近づけなくして鬼を追い払うため、火の勢いが強ければ強いほど、人の運が強くなり、厄除けにもなり、悪い運を変える効果があげられるんだそうです。しかし、風の強い日など、燃え切らないうちに紙銭が舞い上がり、火事にならないかとハラハラすることもあります。

また、拜拜の済んだ商店前の路上には燃えかすの紙銭が散らばり、まるで、道路は広大なゴミ捨て場のようなようです。

日本では中元（七月十五日）は単にお世話になっている人への贈り物をするだけの行事になっていますが、もともとは盂蘭盆と呼ばれる仏教行事です。日本にはどういう訳か「中元」の言葉しか入って来なかったようですが、「上元」（一月十五日）も「下元」（十月十五日）もちゃんとあって、あわせて三元節と言うのだそうですよ。

中秋節

あれからもう十年ぐらい経ったと思いますが、今でも鮮明に覚えていることがあります。

何回目かの台湾に遊びに来たときの事です。夕方ちかく友達の家を訪れた時、庭先にテーブルが置かれ、その上に水・果物・お菓子など供え物を家族の人が並べていたのです。

実はその日が旧暦の八月十五日の中秋節だったのです。

そうとは知らず、友達に「今日何かあるの?」と聞いたら、彼は「今日は中秋節なんだよ。」と教えてくれたのです。

この時は、ただ単に

「へえ、台湾も日本と同じようにお月見の習慣があるんだ。」と思っただけでした。

しかし、台湾に住むようになってからは、台湾が日本と同じ事をしてい
るのではなく、日本にある伝統的な行事の大部分は昔、中国から伝わって
きたものが多いと言う事に気がついたのです。

「昔の日本は中国から漢字のみならず政治、文化、建築、仏教など多方面に
わたり吸収してきた。いわば、中国は日本にとって先生だったのです。」
と学校で学んだ記憶がありますが、日本人なら誰でも知っている七夕や
お月見や干支などさえも中国から伝わって来たものだとは夢にも思いませ
んでした。

台湾では、中秋節は満月を眺め、家族は月餅と呼ばれる中国式お菓子を
食べる習慣が定着しているのです。月餅はお餅ではなくて、色々な餡が
入った一家の団欒を象徴する伝統的な中国菓子です。月餅にも北京式、
広東式などいろいろありますが、もし、この時期に台湾に来たら、是非
日本へのおみやげに持って帰ると喜ばれますよ。

このへんで、都会に暮らしているとお月見なんて風流なことをする時間
がないと言う人のために中国の月と月餅にちなんだ伝説を話しましょう。

(その一)「嫦娥奔月」(嫦娥月にのぼる)

むかし、むかし十個の太陽が地上をギラギラと照らしていた時のことです。地上の人間は暑くてたまりません。そこで、天帝は弓の名人の後羿（ホウイ）を呼んで、「いいか、太陽を脅かすだけでいいのだ。殺したりするな」と厳命したのです。

しかし地上におりた後羿はあまりの暑さと持ち前の短気な性格が災いして、九個の太陽を射落としてしまったのです。

射られた太陽は黒い三本足のカラスになって落ちて来たのです。

最後の太陽を射落とそうとした時、一本の矢がありませんでした。

それは后羿の妻の嫦娥（ジョウガ）が「十個の太陽を全部射落としたり地上は夜だけの世界になってしまう。一つだけ残しておこう。」と考え、一本隠して置いたからでした。一方この事を知った天帝は

「あれほど、殺してはならぬと言ったのに、お前ら夫婦は追放だ。」とカンカンになって怒り、夫妻を神の地位から凡人に格下げてしまったのです。

ところが、地上の人々にとって后羿は命の恩人です。干ばつと酷暑から救ってくれたのですから、彼を国王として迎えました。しかし、その後の后羿は大変残酷な暴君となってしまう、民衆の苦しみなど顧みず、贅沢三昧の暮らし。ある時、長年の夢であった不老長寿の霊薬を女神から手に入れたのです。それを聞いた嫦娥は「夫がこの薬を飲んで永遠に生き続けたら、民衆の苦しみも永遠に続くだろう。」と悩んだのです。

そしてその解決方法として考えたのが

「そうだ。夫に変わって私が飲んでみよう。」とこっそり飲んだのです。すると、どうでしょう。かのじよの体はフワリと上がったかと思うと、一気に月まで高く飛んだのです。なにかかぐや姫と似ているでしょう。それはそうと、かの嫦娥は一人寂しく月にある「廣寒宮」と言う名の、聞いただけでも寒気のする宮殿に住むようになったのです。

ですから、中秋節の満月の夜は、自分を犠牲にしてまで人々を救った美しい嫦娥の姿が見えるのです。

*ちなみに、日本では月でうさぎが餅をついていると言いますが、中国では「玉兔杵薬」と言ってもうさぎは仙薬を作っているんだそうです。

(その二) 月餅にまつわる耳よりな話

時は、十四世紀の末ごろの元朝の時代のことです。蒙古人のあまりの暴政に漢人たちは不満の限界に達していました。かれらは指導者の朱元璋を中心に元朝を滅ぼそうと計画をしている時、部下の一人がこう提案したのです。

「親分、月餅の中に『中秋節の夜、漢人は一斉に決起せよ。』とのメッセージを書いた紙を入れ、餅売りに変装して漢人の家に配ったらどうだろう。」
「そりゃ、おもしろい。よし、この手で行こう。」と言う訳で、この策略はまんまと成功したのです。ついに元朝は滅び明朝が誕生、朱元璋は初代皇帝の椅子に座ったのです。それ以来中秋節に月餅を食べるようになったのだそうです。

六百年を過ぎた現在も、日本人が月見団子を食べると同じ様に、この月餅を食べることが、中国人にとって楽しみなんだそうです。だから、常日頃お世話になっている人に対し、月餅を贈る習慣があるのです。以前は会社でも社員に中秋節になると、月餅をあげたものですが、最近の社員は会社から毎年もらう月餅に飽きて、「社長、私たちは月餅よりもお金のほうがいいですよ。どうか、今年は現金でくださいよ。」

それを聞いた社長さんは「ああ、いまどきの人はドライな事。もうすっかり月餅の意味など失われている。」とい嘆くことしきり。

結婚式

もうすぐ、旧正月。今台湾では結婚のシーズンです。それは台湾の諺にもなっている「お金のある人もない人もお嫁さんをもらって、いいお正月を迎えよう」ということからきているからなんだそうです。

花嫁さんのことを、中国語では「新娘（シンニャン）」と言いますが、「“新娘”と新年を新居で迎えられる」台湾の新郎はまさに「わが世の春」と言った感じ。家族と離れて都会の片隅でたった一人で迎える正月は寂しいものです。この言葉は、まさに独身生活が長い人のためにあるようなものです。日本の年末は誰もが忙しいし、寒いので台湾のように正月に挙式をする人はごくまれで、結婚適齢期をすぎた独身の人にとっては台湾の習慣がうらやましく感じられるのではないのでしょうか。

*台湾でも日本同様、三十過ぎても「結婚したがる女性」と「結婚したいけれど相手が見つからない男性」がゴロゴロしているのです。そして離婚する率も五組に一組の割合なんだそうです。

台湾では結婚は「縁份」がないと結婚できないとよく言われています。いくら「縁」があっても、もう一つの「份」がないとダメだということです。「份」とは赤い糸で結ばれている運命的なものといえるかもしれません。

以前の農業社会の台湾では、二人が同じ名字の時、二人の間に三歳、六歳、九歳の年齢差があるとき、また、二人の姓名の字画数、生年月日から判断された「八字」の相性が合わないときは相思相愛の仲でも結婚できなかったのです。最近ではだいぶこれらの迷信を信じる人は少なくなってきたとは言え、まだまだ根強く残っているようです。

結婚の日取りは、日本ではたいてい暦の「大安」の日を選んで決める事が多いですが、台湾では、二人の「八字」を基に縁起のいい日時を決めるのです。そして、結婚式の当日は新郎側は必ず偶数の台数のクルマで“新娘”を迎えに行かなければならないのです。二台では少ないし四台では縁起がよくないし、六台では多すぎるし、というので苦慮する人も少なくありません。挙式は新郎の家にある祭壇でする方法のほかに、台湾では公証結婚と言って、法院（裁判所）で済ませる人もいます。費用も安く簡

単に挙げられて、結構人気があるんですよ。裁判官が証人になってくれるのですから、これ以上心強い証人はいません。法院の中に式場があり、ここであらかじめ申し込んだ人達と一緒に式を挙げるのです。ちなみにぼくも公証結婚だったんです。

挙式の時、日本だったら三三九度の盃をお互いに交わしますが、台湾では祭壇に設けられた神様などに対して三拝したあと結婚指輪を交換するのです。挙式が無事済んだあと、親は、“新娘”が新郎のクルマに乗る前に道路に水を撒くのです。そして、“新娘”の方も車中から外に扇子を放り投げるのです。それは挙式のクライマックスとも言える瞬間です。そして、それは元に戻らないことを意味する最後の別れを告げる儀式なんです。地上に落下するのを見届けた親も“新娘”も感慨無量。言葉は交わさなくてもお互いに気持ちはわかるのです。そうしているうちに、爆竹が鳴り響く中新婚カップルを乗せたクルマは一路新郎の家へ向かうのです。

*台湾ではまず“新娘”の家の祭壇でお別れを告げ、新郎の家に着いたらこんどは祭壇で祖先に結婚の報告するのです。

新郎の家に着くと、これまた爆竹が鳴り響いて、車から降りた“新娘”の手に、お化粧した可愛い子供から「みかん二つ」手渡されるのです。これは、新郎新婦は今後一緒に「同甘同苦」を共にするからなんだそうです。そして、“新娘”は竹で編んだ丸いお盆のようなもの（または傘）を頭の上に翳しながら新居に入るのです。これは悪魔が新娘の体に入り込まないようにする一種の魔除けなんです。そして、面白い事にこれを使えるのは初婚の時だけで、再婚の場合はだめなんだそうです。それで「ああこの人は再婚なんだ。」と隣、近所の人には察することができるのです。新居には結婚式に参加出来なかった人を中心に“新娘”の晴れ姿をみたい人が待っていて、この日一日“新娘”は新郎以上に気疲れするのです。

そして結婚披露宴になると、これまた日本とは大違い。大部分のお客さんは招待状の時間より遅れてくるし、帰りも最後に出るデザートを食べ終えたら適当な時間に帰ってしまうので、いつ始まったのか、いつ終わったのかわからないんです。普通はスピーチもありませんし、歌も歌いません。飲んだり、食べたりして、騒いでいると、そのうち新郎新婦が各テーブルを回ってきたら、彼らにお祝いの言葉を述べ、乾杯しあうのです。その後は、友人、知人を見付けると自由にテーブルを移動して、そこでまた同じように繰り返すのです。そして披露宴の最後に新郎新婦にタバコや飴をもらって帰るだけですから、日本のように余計な神経を使わなくてもいいのです。べつに服装を気にすることもありませんし、

家族全員でも、招待状をもらわない人でも誰でもが参加でき「来る者は拒まず」なんです。テーブルは丸いテーブルですから、誰が上座ということはなく、また予定人数より多少増えてもテーブルの数を追加するだけですし、席も決められていませんし、引き出物の習慣もないので日本のように新郎新婦側が頭を悩ますことはないのです。また、何回かのお化粧なおしやウエディングケーキカット、キャンドルサービス、双方の両親にお互いが花束贈呈とかいった日本での披露宴の一連の儀式は、ここ台湾ではあまり見られません。さらに、日本と違う点は、白いネクタイは忌み嫌われることです。台湾では白は葬式だけなんです。めでたい時はいつも紅色（赤）を用いるのです。

まさに「所変われば、品かわる。」ですね。でも新郎新婦の門出を祝ってあげようとする気持ちはどこの国の人も変わらないのです。

旧正月前後はどこのホテルもレストランも、ただでさえ忙しいのに、結婚披露宴のお客さんが加わっててんてこ舞い。猫の手も借りたいとはこのことでしょう。当然「こんなに混雑するところで披露宴をするのはいやだ。もっと仲間内でゆっくりやりたい。」と考える人達があります。彼らは、日本人には及びもつかない所で披露宴を行うのです。どこだと思いませんか？ 以前の農業社会ではホテルやレストランなどで披露宴ができるのは一部の人達だけ。庶民の知恵から生み出された方法は最も安上がりで合理的な場所である家の前の庭や道路なんです。だから、庭や道路の片側を利用してテーブルを並べテントを張り、即席の会場を作って招待客を迎えるのです。台湾に来たことのある人の中には「私も冠婚葬祭に道路が利用されている光景を見た」と言う人がいるかも知れませんが、今はクルマ社会ですから、だんだん少なくなりつつあります。しかし都市部以外では、結婚に限らず、葬式の時もよく道路が占拠されているのが見られるのです。

拝拝（パイパイ）

台湾では「拝拝」と呼ばれている民間信仰の祭祀が人々の生活に大変密着して、台湾の年中行事はこの民間信仰によるものがほとんどなのです。台湾の民間信仰はほとんどが中国大陸南部から伝わって来たもので、古代の自然崇拜的な原始宗教から後の仏教・道教などの多神教が融合された総合的な宗教なのです。台湾は実に多くの神様が住んでいる島です。寺廟の主神だけでも二百種に達し、従神・陪神の数は楽に千五百種を超えるんだそうです。

そして、台湾全島で何と大小あわせて五千以上の寺廟があると言われていて、「三日に一小拜、五日に一大拜」と言われるほど「拝拝」は各地で盛んに行われているのです。特に毎月旧暦の一日・十五日はどこの寺廟も善男善女の参拝客でにぎわいます。そして二日・十六日になると、商店の店先で果物などの供物を供え、お線香を上げて、紙を燃やして「土地公」と呼ばれるその土地の神様を拝み、商売繁盛を願う光景があちらこちらで見られるのです。

*これを「做牙」と言い、一年の最後にあたる十二月十六日の「拝拝」は「尾牙」と呼ばれ、ラオパン（90頁参照）は従業員にごちそうをふるまうのです。だから、一般的に、台湾の忘年会と言えば十二月十六日（旧暦）を指すのです。

台湾の「拝拝」の特徴は日本とは違う線香を用い、また冥紙と呼ばれている紙を燃やす習慣があることです。

まず、線香は二種類あって、まず蚊取り線香に似た火持ちの長い「盤香」。もう一つは普通の線香ですが、台湾の線香は日本のよりもずっと太くて長く、持つとすぐ手が赤く染まってしまうほど赤い色が付いています。そして線香を持つ本数は三本だったり、一本だったりするのです。そして、亡くなったばかりの人を拜む時は二本使うのです。

次に、日本では見られない紙を燃やす習慣。紙といっても要らなくなった紙を燃しているのではないのです。この紙は、実は神界やあの世で使うためのお金「紙銭」なのです。台湾の人達は鬼（幽霊）や神様は人間から変わってできたものであるから、神様もお金が好きだと考えているのです。それでいろいろな

神様の誕生祝いのお祭りや祖先への礼拝や無縁仏の供養などの際、ブタやニワトリなどをお供えし、線香をたいて、紙銭を焼くのです。大きなお祭りになるほど、たくさんの金紙や銀紙が焼かれるのです。

そして、「地獄の沙汰も金次第」なので葬式のときも亡くなった人にあの世へも持って行ってもらおうと、たくさんの紙銭を焼いてあげるのです。

さらに副葬品として、紙で作った家、自動車、冷蔵庫とあの世へたくさんの物を持たせてあげるのです。残された者が不孝者と言われないように。

このほかに「拜拜」は人智以外の超自然の力が働き自分の願いごとが叶うようにお祈りする時、例えば株式投機や選挙に出馬した時なども必ず紙銭を燃やすのですから、いくら環境破壊の元凶の一つだと言われても、この習慣は盛んになることはあってもなくなることはないでしょう。

名前の呼び方

台湾では、日本と違って、名前の後に敬称に当たる「さん」をつけないで呼ぶほうが断然多いんです。新聞には敬称なしで人の名前が載っているし、テレビのニュースでも、人の名前をそのまま敬称なしで呼んでいるのです。一般の人もスポーツ選手も犯罪者も有名な人も外国の政治家も分け隔てなく誰もが「呼び捨て」なんです。

もちろん、知らない人やそれほど親しくない相手には日本語の「さん」に相当する「先生」（男性に対して）や「小姐」（女性に対して）の言葉があります。では、日常生活でどんなときに「先生」（中国語でシェンスンと発音する）と言う言葉が使われるかと言うと、仮に相手の名前を知らない時、すなわち誰かに道を尋ねる場合とか、店員がお客さんを呼ぶ場合は単に「先生」と言えばいいのです。また、林さんが取り引き先の人で、電話などで彼を呼ぶ時は、もちろん「林先生」と言います。そのほかの使い方として、例えば、「ご主人のお仕事は？」と聞く場合のご主人の意味に相当する言葉としても使われます。

* **** 日本語では、「先生」と言う言葉は学校の先生、お医者さん、弁護士、代議士などの人に対して使われますよね。しかしここ台湾では、成人男性ならば誰もが先生なのです。というのは、英語の「Mr」に相当する言葉だからです。

ちなみに「小姐」（英語の「Miss」の意味）も同様な使われ方をします。だから、手紙に「CE先生」と書かれてあるのは「さま」の意味に使われているのであって、決して受取人は先生ではないのです。

でも、林さんと友達の時フルネーム又は名前だけでいいのです。名字の後ろに「先生」を加える必要がないのです。林先生と呼ぶと、まるで赤の他人から言われたような感じがするのだそうです。私たち日本人も、親友を呼ぶ時は「くん」「さん」を付けずに呼び合いますよね。もっとも、本人同士の習慣にもよるでしょうが――。

しかし、いくら長い間台湾に住んでいても、ぼくはこの「呼び捨て」される

ことに対してなかなか馴染めないのです。「先生」をつけてもらわないほうが相手は、ぼくに対して、親近感をもっているんだとわかっているけど、相手が年下の人や女性の場合は特に抵抗があります。だって日本だったら「K I S O Uさん」なのに、台湾では「K I S O U」と呼ばれるんですから。だから、日本語のわからない人が、ぼくの名前を聞いた時には「K I S O U S A N」と教えているんです。

更に、もっと抵抗を感じるのは自分の妻が他人から名前を呼ばれた時です。

どうしてかって？

そりゃそうでしょう。考えてみてごらん。台湾では顔なじみの時は敬称をつけないと言ったばかりでしょう。自分の妻の名前が仮に「サチコ」の場合、自分の目の前で、妻がほかの男性からも「サチコ」と呼ばれてしまうんですよ。日本人なら、きっと「てめえ、人の女房に向かってサチコとはなんだ。馴々しく呼ぶな。」と血相をかえて怒りますよね。

また、あとで夫婦喧嘩にもなりかねませんよね。

「おまえは、あいつとどういう関係なんだ。」とか何とかで、いくら妻に「何の関係もないわよ。単に小学生のときの同級生だわよ。」などと否定されても、妻に対して疑心を抱いてしまうことでしょう。

でも台湾では、そんなことはないのです。ぼくの妻もよその男性から「呼び捨て」されても全然気にしないそうです。しかし日本人のぼくにすれば、複雑な心境にさせられてしまいます。やっぱり、ぼくは日本人なんです。

第三章 ウォッチング台湾

ロードショー

台湾では寺廟のお祭りには、必ずと言っていいほど、寺廟前や道路上に作られた仮設舞台でいろいろな出し物が見られ、台湾の民間芸能が無料で楽しめるのです。外国人のぼくには、何を言っているのかチンプンカンプンですが、あるものは昔の日本を見ているようでおもしろいですよ。

台湾では芝居が始まる合図として銅鑼などをしばらく鳴らし続けるのです。これは二つの意味があって、一つはみんなに芝居があることを知らせ、もう一つは神様たちが地上に降りて来てこの祭礼を祝福し、一方そのやかましい音で悪霊を驚かせて追い払う意味があるんだそうです。

ここで台湾の代表的な民間芸能を四つ簡単に紹介しましょう。

お年寄りの人に人気があるのは、コーアヒー（台湾語）と呼ばれる歌仔戲です。台湾で生まれた唯一の民間芝居で、テレビのドラマでも見れます。台北の中正 記念堂の前にある国家戯劇院は日本と言えば国立劇場に相当する中国式オペラハウス。ここでも時々上演されますが、やっぱり露天で椅子に座って見たほうが庶民にはピッタリするような気がします。

子供のころ指人形を作って人形芝居をしたことはありませんか。人形を指先で操ることから別名掌中戲とも言われる布袋戲は台湾の芸能を代表するものです。丸太の上に舞台が作られるので、かぶり席の人は指人形を下から見上げる形で見ています。何でも、戦前は「水戸黄門」などが袴姿で刀を振り回す人形で上演されていたそうですよ。

それから、厄除けの儀式の際などに演じられる傀儡戲。傀儡とはあやつりのことですから、傀儡戲は糸あやつり人形の芝居です。

最後は影絵人形芝居の皮猴戲。白い布にライトを当てて人形の影を写しだすのです。傀儡戲と同様台湾の一部でしか見れないそうです。台湾の民間芸能に興味のある方は、「毎年十月ごろ、台湾のあらゆる民間芸能が台北の青年公園で四日間に渡り演じられていますので、この期間を狙って見に行くようにお勧めします。」との関係者の人の話しでした。

これらの民間芸能のほかにも、よく路上や公園や広場、空き地を利用していろいろな見世物が公演されます。マンションの売り出しの時も、建設予定地にやぐらが組み立てられ、この特設舞台でショーが行われるのです。それは歌手だったり、女優だったり、外人モデルだったりします。また、夏休みの時期夜になると、ときどき路上で映画を上映しているのを見たことがあります。台湾では路上で実にいろいろなショーが見ることが出来て、これが本当の「ロードショー」を見てきたと言えるのではないのでしょうか。

テレビ

台湾ではテレビのない家庭はないと言っていいでしょう。台湾には台湾テレビ、中華テレビ、中国テレビの三つの放送局があります。朝六時半ごろから深夜まで放送していますが、日本のように定刻に始まって定刻に終わる事は、まずありません。始まる時間も終わる時間も一応の目安にすぎないのです。日本があまりにも時間に対する観念が厳格すぎるのか、台湾の方が時間に対しては寛容のようです。例えば、七時のニュースが三十秒前に始まったり、一分遅れて始まったりしても視聴者から文句を言われることはありません。また土曜の深夜番組のおもしろい映画を録画しようと思っても新聞のテレビ番組紹介欄には終了時間が書いてないので、自分で推測するか、テレビ局に問い合わせるかしなければならないのです。

さらに、日本のテレビと異なる点は、画面の下に中国語の字幕が出てくることです。この字幕はぼくのように聞いてわからない人にとって大変役に立ちます。日本だったら、外国映画だけですが、台湾ではニュースを除いて、すべて字幕がでてくるのです。

台湾の人達は「台湾のテレビ番組はつまらない」とよく言います。そこで起死回生策で最近日本のドラマが登場するようになったのです。なかでも去年爆発的な人気を呼んだのが「阿信」(お信)の番組でした。最初はあまりいい時間帯でなかったんですが、評判が高まると、夜八時のゴールデンタイムで毎日放映されたのです。もちろん吹き替えなので(音声多重放送の装置がない家庭では)子供達の中には「あの日本人の子供ずいぶん中国語が上手だね。どうして話せるの。」と親に聞いた子もいたそうです。以前は、テレビや映画で日本のものは禁止されていたのです。それでレンタルビデオショップで日本のテープを借りてきて見ていたのです。「台湾のテレビはつまらない」ので一時ビデオショップが大繁盛の時期もありました。

しかし、今では「第4台」と呼ばれている有線電視台(ケーブルテレビチャンネル)が急激な勢いでこれにとって替わりつつあり

ます。なにしろ、月七〇〇元（約二七〇〇円）程度でNHKやCNNなどの衛星テレビを始めとしてなんでも自分の好きなもの60チャンネルの中から選んで見れるのです。

だから、台湾にいながらして日本のテレビ時代劇、サスペンスドラマ、連続ドラマなどが見られ、日本語のテレビ番組に不自由することはありません。すでに普及率も60%台を越え、最近では新聞のテレビ番組の欄が以前の三行からほぼ一面に拡大され、またテレビ番組専門の雑誌も発行されているのです。今後さらに第4台は伸びていくことでしょう。こんな狭い台湾に第4台の業者が二百社前後あるなんてギネスブックものだそうです。だから、電柱やビルの屋上は、各社のケーブルが張り巡らされ、地上は交通ラッシュ、屋上はケーブルラッシュで、今の台湾は「乱」の字がピッタリなんです。

見る

見るといえばテレビの次は映画です。台湾では映画が見られる所は二か所あります。

まずポピュラーなのが映画と言えば映画館で見る方法。台湾の映画館は朝十時ごろから 最終回は夜十一時までの一日八回上映している所も少なくありません。

日本人が聞いたら中には「そんな遅くまでやっていて見るお客さんがいるの？」って 心配してくれる人が出てきそうですが、ここは台湾。心配ご無用。ちゃんとお客は隠れているのです。それは台湾ではデパートやレストランや商店などに 勤めている人は夜十時ごろまで働いているのです。だから仕事の引けた後、映画館はこれらの人でにぎわっているのです。

日本の映画館と違うのはその看板の大きいこと。三メートル (E 五メートルほどのドデカイ 看板に蛍光塗料を使い、赤や黄色などの原色で描かれています。そして洋画の看板も 映画の題名、出演者の名前はもちろん全て旧漢字で書かれていますので、有名な映画スターの 似顔絵でもない限り、まるで日本人にとってはチンプンカンプンなんです。

映画館の前では鶏の足の煮付けを売っている屋台も出ていたりします。そして肝心の 映画館の中は、小さな部屋に区切られていて、それぞれ違う映画を上映しているのです。だから、外にある看板はすべて今上映しているものなんです。

以前の映画館はひとつだけ上映していましたが、今ではビデオやケーブルチャンネルに 客を奪われてしまい、苦肉の策として考えられた方法なんです。

映画の料金のほうはどんな映画でも二百円元 (約八百円) 以内で日本に比べたら そりゃ大変割安です。

台湾のチューインガム（ビンロウ）

バスを降りて大通りを歩いていると、急に前のクルマの窓が開き、助手席に乗っている人が赤い血を吐いたのです。びっくりして、立ち止まってよくそれを見ると血とはちがうものでした。これがビンロウとのはじめての出会いでした。

ビンロウは台湾のチューインガムと呼ばれるもので、ビンロウの愛好者は約三〇〇万人いると言われています。

ビンロウには眠気を覚ましてスッキリさせる効果があり、トラックやタクシーの運転手の間に人気があります。しかし、タバコと同じように習慣性があり簡単にはやめられなくなるんだそうです。タバコを吸うとニコチンで歯の裏が黒くなると同様に、ビンロウも噛んでいると歯の表も裏も真っ赤になってしまうのです。

だから、ビンロウを噛みながら話しているのをみていると、早くその人の前から逃げ出したくなるんです。だって口の中が真っ赤なので気持ちが悪くなるのは当たり前でしょう。日本人のぼくには、とてもビンロウを噛む気持ちにはなれません。

ビンロウは儲かるというので、ほかの作物をやめてビンロウを植える農家が少なくありません。中部の観光名所で有名な日月潭と言う所に行く途中、ビンロウの屋台の店が道路の両側に並んでいます。また周りの椰子の木、バナナ畑に混じって、そこかしこにビンロウの樹が青い空に向かってまっすぐに伸びていて、南国にきたんだということを実感させられます。ビンロウ樹は一本の木にたくさんの実をつけます。それで、昔は結婚披露宴に参加してくれた人達にビンロウの実も、お開きのときに配ったんだそうです。どうしてかって？ それは、ビンロウ樹にあやかって、子宝に恵まれることを意味していたんだそうです。



最後に耳よりな情報、儲け話を教えます。ビンロウはタバコと違って販売しても税金がかからないそうです。そして、長期保存ができないので市販価格は季節によって全然違うのです。十一月ころが最も安く四個十元、五月から六月にかけては台湾産がほとんどなく、タイ・マレーシアなどからの外国産が出回りますが、これが味もまずくて値段は百円で三個ぐらいしか買えないのだそうです。

もし、ビンロウの保存方法を開発し成功させればあなたは必ず世界の
大富豪の仲間入りできますよ。

町の中の日本発見

台中に住み始めた頃は、日本商品を売っている店はほとんどありませんでした。しかし、しばらくすると日系のデパート、スーパーができ、日本商品が身近に手に入るようになりました。そして今では輸入商品専門店でも日本の日用品から雑貨お土産品まで買えますし、テレビもケーブルチャンネルを利用すればNHKや人気ドラマなど何でも見られるのです。台湾のテレビ局でも、日本の番組を吹き替えですが、時々放送しています。

だから、朝は納豆を食べ、昼は日系のデパートで日本語での店内アナウンスを聞きながら買い物し、夜は日本のビールを飲みながらNHKニュースを見て、夜食はお茶漬けをすすって寝るという、全く日本にいるのと同じ生活ができるのです。

外の娯楽もパチンコ屋はあるし、KTVと呼ばれるカラオケボックスに行けば、日本の歌が歌えるのです。

それから、日本ではあまり見られなくなった畳屋さんもありますよ。台湾では4LDK以上の広さのマンションでは部屋の一つはだいたい和室にするんだそうです。台湾では和室はナウいんです。

市内を散策してみると、「日本」がたくさん発見できます。まず、建築物のなかにあります。日本時代からの文化遺産ともいうべき、台中駅、市政府、彰化銀行などの建物は代表的なものです。戦前から残っている屋根瓦の住宅や市内の伝統のある有名な学校は全部日本時代に建てられたんです。だから、台中師範、台中女中、台中二中、大同国小などには日本人卒業生がいて、同窓会の時には日本語で少年少女時代の昔話に花を咲かせるのだそうです。

建物のほかに、町の看板にも「日本」を発見できます。それはひらがなの「の」の字や「貴花田」（日本料理屋）や「新宿」（マンション）や「いらっしやいませ」があつたりして、こうやって探して歩くとなかなか面白いですよ。

日常生活のなかにも「おじさん」「おばさん」「運ちゃん」などの言葉が、親しみを感じさせる言葉として台湾語の中に堂々と生きているのです。

また、子どもたちが好きな漫画は、ほとんどが日本の漫画で、それも発売されたばかりの習慣漫画雑誌の翻訳版が4日後には並べられているのです。日本の大人が顔負けするほど、ドラゴンクエスト、セラームーン等こちらの子供達はよく知っていますよ。

ここ数年前からセブンイレブンをはじめファミリーマートなどコンビニもだいぶ増えてきました。日本の宅配業者も進出してきました。

「ああ、こんなに日本がいっぱいあるのに、どうして日本人は台湾のことを知らないの？」とため息が聞こえてくるようです。

台湾の靖国神社

ここは台中市にある寶覺寺というお寺です。台中は人口が約 80 万人、文字通り台湾のほぼ真ん中に位置しており、台中を訪れた日本人観光客が必ず足を運ぶ所が寶覺寺なんです。

どうしてかと言えば、それは戦前中部台湾でなくなった日本人 1 万 4 千柱の遺骨を埋めた日本人墓地があるからなんです。でも現地の人達からは布袋様の顔をした大きな大仏様があるお寺として有名です。このお寺は 1928 年に建てられ、境内には高さ 30 メートルの黄金色に塗られた弥勒大仏のコンクリート像があり、何となく鎌倉の大仏様の親戚のところに来たような感じがしたりするの、一段と日本人に親近感を与えてくれるのです。

さて、毎年 11 月 25 日には日本人墓地のそばにある靈安故郷記念碑の前で盛大な日台合同の慰靈祭が行われるのです。この記念碑が何なのか、どうして建てられたかを知っている人は 関係者以外にあまり知られていません。実は、ぼくも今まで知らなかったのです。

最近ぼくの家近くに住んでいる楊さんと言う方と知り合い、「実は私たち中日海交聯誼会が発願して数年前に建てたんだよ。」と聞かされて初めて知ったわけなんです。

楊会長は元日本海軍志願兵の一期生で戦後生まれのぼくの知らない「海ゆかば」などの軍歌をいまだに覚えているのです。では、話の続きを聞いてみましょう。

「この碑はね。太平洋戦争の時、当時私たち戦友が日本兵として戦場に散った 3 万 3 千余りの英霊の鎮魂慰靈碑なんだよ。まあ台湾の靖国神社と言ったところかな。そしてあの碑は李総統の直筆で書いてもらったものなんだよ。あの当時、台湾人日本人の区別なく共にアジア民族のために戦おうと、同じ釜のメンを食べ苦楽を共にしたから、年老いてもずっと付き合えるんだよ。今では家族ぐるみでのつきあいをしているよ。この写真はね。同じ海軍仲間の日本人の家にお邪魔したときの写真だよ。」

毎年慰靈祭には日本の姉妹会のメンバーとともに揃いの白い制服で台北の交流協会の人なども参列し日本の神主さんが儀式を行うんだそうです。そして「ほら、見てごらん。ここに載ってるよ。」と言って、新聞を見せてくれたのです。興味のある人は由来が石碑に詳しく日本語文と中国語文で書かれてありますので、

もし参拝する機会がありましたら、是非読んでみてください。



その他この境内には、4階建てのやぐら式友愛の鐘樓の屋上には戦前台湾で生まれた日本人の有志が寄贈した「友愛永伝の鐘」があります。また、本堂に安置されている解夢観音は日本仏教会が中華仏教会に送ったものだそうです。こうしてみると、この寶覺寺と日本人はいかに深いかわりがあるのかわかりますね。

●李登輝総統（今でも総統と敬愛されている）直筆の「靈安故郷」慰霊碑はここ寶覺寺だけでなく台北近郊の烏来（ウーライ）温泉にもあります。以前寶覺寺で行われた慰霊祭に参加した折、台湾高砂聯誼会会長の愛子さん（本名：周麗梅さん）を楊会長から紹介してもらって知り合いました。愛子さんは当時の高砂兵士を知る者の道義的使命としてこの碑を完成させた功労者なのです。3年前に家族で烏来へ行った時に、愛子さんを尋ねたのですが、あいにく会えませんでした。記念碑はタイヤル文化村のすぐ横の階段を上ったところにありました。空の澄み切った青空に日章旗が翩翻と翻っていて、日本ではめったに見ることの出来ない光景に圧倒されてしまいました。

そして、台座の右側には本間中将の遺歌が次のように刻み込まれていたのです。

「かくありて 許さるべきや 密林の かなたに消えし戦友（とも）をおもへば」

*日本では来月総選挙がありますが、道義的責任を感じて、台湾に来て

「台湾のみなさん、大変ご苦勞をおかけしました」などと元日本人だった同胞にねぎらいの言葉を一言いえる政治家（日本政府）の人たちの中に果たしているのでしょうか。それとも、日本語世代の人たちがこのまま消えていくのを待って、そ知らぬ顔して黙り込みを続けるのでしょうか。いつまでも中国政府の顔色を窺いながら——。以前の来日騒動で李総統から「日本はノミの心臓より小さい」と揶揄されるぐらいですから、日本政府高官の人が訪台しての一言なんて元日本人の人たちは、もうどうでもいいことだと思っているかも知れませんね。

台湾に住んでいる「日本人」

外国に住んでいる日本人で国家元首が三人いますが、誰でしょう？
ヒントは、この場合の日本人は広い意味での日本人です。親が日本人なら当然子供も日本人、だから三世でも四世でも日本人の血を受け継いでおれば日本人とみなします。」

「あっ！ それならわかった。ベルーのフジモリ大統領でしょう。」

「そうです。じゃ、あとの二人は？」

「うーん。いくら考えてもわからないよ。」

「では、二人目を教えてあげましょう。その人はパラオのナカムラ大統領。

聞いたことないって？ じゃ、仕方ないなあ。では、最後は誰だか当ててごらん。今度は日本名じゃないけど、日本の京大出身で最近よく新聞に載っている人なんだよ。」

「まさか、台湾の李登輝総統じゃないでしょう？」

「そのまさかがそうなんだよ。」

「え？ ホント、ウソー」

「ウソじゃないってば。本人がそう言ったんだよ。司馬遼太郎との対談の時、告白したんだよ。戦前までは日本の植民地だったから、台湾の人達は日本人として教育を受け、名前も日本名に改名させられたんだって。」

台湾にも終戦当時から住んでいる日本人がいます。また少年時代は日本、戦後は中華民国そしてアメリカと一生の間に3回も変わったという日本ではありえない体験の持ち主の「日本人」もいるのです。

その日本人はきれいな日本語でぼくにこう言ったのです。

「日本政府は戦前は『お前らはみんな日本人だ。天皇の子供だ。』と。そして戦後は『お前たちはもう日本人じゃない。だから、戦後補償の義務はない。』でもね。喜早さん、確かに法的には問題ないかもしれないけれど、人道的な立場に立てば、そんなこと言えないよね。そう言っているあなた(日本政府の人)がもし、ぼく(台湾生まれの日本人)に立場だったら、どうする？

ぼくたちは何も賠償金が欲しい訳じゃないんだよ。物心がついたと

きから、中学生のときまで日本人として育ってきたんだよ。だから、『もと日本人のみなさん。ごめんなさい。お詫びに日本のパスポートで一度日本観光に招待します。』と言ってくれたら、それでいいんだよ。』

第四章 エッセイ

靴磨きのおじさん

数年前高雄へ行った時のことです。もう40年前の1970年代の話になりますが、あの事は今もお鮮明に覚えています。それは高雄駅での出来事でした。駅の構内でぼくは靴磨きのおじさんを見掛けたんです。東京に住んでいた時、新宿駅前の歩道でよく見掛けたことがありましたが、駅の構内では赤帽も靴磨きのおじさんも姿を消してしまっただけで、懐かしい感じがしました。

「おじさん、いくら？」と聞こうとすると、なんとすぐ目の前にダンボールの切れ端に「一足一〇〇元」と書いてあるではありませんか。これは台湾元だから、日本円に換算すると約500円かとすばやく頭で計算して「おじさん、お願いします。」と、まず右足を台の上にのせました。

かのおじさんは慣れた手つきで靴磨きを始め、終わると

「お客さん、左足は？」と言うんです。

変なことを聞く人だなと思って

「もちろん、もう片方も頼みますよ。」と答えました。

しばらくして、おじさんは

「はい、終わりましたよ。お客さん。」

「ありがとう」

ここまでの会話は、ごく自然な形で進んできたんです。でも、

このあとの会話は本当に「一本とられた」と思いました。誤解はダンボールの看板から始まっていたのです。

「じゃ、これ100元」と言って立ち去ろうとすると、

おじさんは

「お金たりないよ。200元だよ。」

「どうして？ いっそく100元でしょう。」

おじさん曰く

「あの字はいっそくじゃなく、一つの足と読むんだよ。」

二つ磨いたから200元。」

「ずるいなあ」と思っても、ここは外国、台湾。

「同じ漢字でもこういう読み方ができたんだ」と半ば感心しつつ、

財布からもう一枚の100元札を取りだし渡すと、

おじさんはニコニコした顔で

「どうもありがとう。」と言って、いとも無造作にお金を箱の中に入れてのでした。

あのおじさんは、今も日本人相手にずる賢こく靴磨きの商売を続けているのでしょうか。機会があったら、また会ってみたいと思っています。

ホントウの話

中国語の顔色は日本語で色の意味です。だから、顔色が悪いは単に色が悪いだけで、決して病気で顔色が悪いわけではないのです。台湾で好まれる色は、何と言っても赤です。赤い色は「吉祥」を表わす色で、逆に白は縁起の悪い色とされています。だから、誕生日などのめでたい時は、白いゆで卵の表面（殻の部分）を赤く染めたりするのです。お正月の時も、玄関に赤い紙にめでたい言葉が書かれた春聯を貼るのです。赤い色は中国語ではフンスウ（紅色）と言い、赤十字は紅十字ですし、お年玉などに使う赤い袋はフォンパオ（紅包）と言うように、濃い「赤」以外は「紅」の方を用いるのです。考えてみると、紅葉といっても赤葉とはいいませんよね。紅白歌合戦も赤白歌合戦じゃおかしいですね。

ところで、一戸建ての家の扉もたいてい赤い色ですし、どうして中国人は赤を好むのでしょうか。調べてみたら、やっぱりこれも訳があったのです。

昔、中国に年獣という妖怪が山奥に住んでいました。この妖怪は毎年大晦日になると、里に現れては、村人を食べるのです。村人はたいそうこの妖怪を恐れていました。しかし来襲したある年の時、年獣が赤い色と大きい音が嫌いだという弱点がある事に村人は気が付きました。それで、翌年の年の暮れは前もって色々準備してこの妖怪の来襲に備えたのです。窓には赤い紙を貼り、玄関には門を守る神様の絵を貼り、バンバンと大きな音を立てる爆竹も用意しました。そうとは知らない年獣は爆竹を投げつけられて「これはたまらん」とばかり慌てて逃げて行ったのです。人々は互いの家を訪問し「やったあ」と喜びあいました。これが新年を祝う始まりとなったんだそうです。それ以来、赤い紙と爆竹は欠かせないものになって、めでたい時には必ず使われているのです。

冬になると、台湾でも道端に大判焼きの屋台が現れます。寒い時は日本同様ホカホカの大判焼きを買い求める客が列を作ります。台湾では中にあずきが入っているので大判焼きはフォントウピン（紅豆餅）と呼ばれています。日本語のホントと本当に発音が似ているので、誰もがこの事を知るとすぐ会話の中でジャレを飛ばすのです。

年獣の話を聞いてた妻が

「そんな話はじめて聞いたわ。祥ちゃんは、むかし年獣というお化けがいたの

信じる？」と子供に聞くと、
かれは紅豆餅をかじりながらこう言ったのです。

「うそじゃないよね。パパ。ホントウだよね。」

カトウキヤク'は下等客？

ぼくの日本語の学生は実にいろいろな人がいます。その中の一人、楊さんと言う人は小学校3年まで日本教育を受け、現在は交通局に勤めています。彼から日本時代当時の台湾の様子を聞くと、時間の立つのを忘れるほど面白い話をしてくれるのです。今日は彼が書いた作文を紹介しましょう。

●カトウキヤクは下等客？

楊焜輝

私がこれから書く事は約五年前の「聯合報」と言う新聞に掲載された事実なんです。その記事の内容は台湾鉄道の名前の由来についてでした。彰化県に「花壇」と言う駅があります。およそ七、八〇年前台湾はまだ日本の植民地で、当時は「茄苳（カトウ）脚」駅と呼ばれていました。ある日の事でした。ある日本人の高級官吏が汽車に乗って、台北から高雄に行く途中、この駅に着いた時、駅員は大きな声で「茄苳脚、茄苳脚です。」とスピーカーでアナンスしました。その時、彼はこのアナンスを聞いて、てっきり自分を侮辱していると勘違いして、カンカンに怒って駅員を呼んでこう言ったのです。「貴様、どうしてわしを下等客と呼んだのだ。わしは上等客だぞ。」すると、駅員は「私は、ただこの駅名『茄苳脚』とお客さんに知らせただけですよ。」と答えたのです。かの高級官吏は「茄苳脚」を「下等客」と早とちりしたわけです。自分が誤解していたことに気が付いた彼は「しからば、茄苳は台湾語で何と言うのだ。」と、さらに聞くと「茄苳（カダン）です。」と駅員は答えました。

それ以来「茄苳脚」駅は「花壇」駅に変わってしまったのです。以上の話は事実かどうかは問題ではありません。ただ、私は駅名にまつわる面白い話として皆さんに紹介したかっただけなのです。

お茶の話



ここは「茶藝館」と呼ばれている所で、台湾の人々がよく友達と歓談するのに利用されています。ここでは、時間を気にせずゆっくりした気分で、だれもが、お茶を飲んでいるのです。となりの客がおもしろい話をしていたので耳をそばだてて聞きました。

「ねえ、君。人類はいつからお茶を飲むようになったと思う？」

「そんな事、考えたことないよ。」

「だいたい何年前だと思う？」

「じゃ、二・三千年前かな。」

「ちがうよ。起源は紀元前 16 世紀から 11 世紀にさかのぼるんだって。」

「へえ。すごいね。よくそんなこと知ってるね。」

それじゃ、どうしてお茶と呼ばれるようになったのか、知っているかい。」

「えっ？ 君はそんなこと知っているの？」

「お茶の起源に関して面白い中国の神話があるんだよ。知りたい？」

「そんなに、もったいぶらないで教えてよ。」

「むかし、むかし、神農氏という農業の神様がいたんだって。この神様は

腹の皮が透明になっていてね。どんな風に食べたものが消化されていくのか一目でわかるんだって。それで、彼はいろいろな植物を食べまくって、毒のあるものとないものにと人間のために分類してあげようと考えたんだよ。」

「ツラの皮が厚い人は多いけど、腹の皮が透明だなんて聞いたことがないよなあ。まったく。」

「おい、黙って聞いてよ。すぐ茶茶いれるんだから。お前は。」

「ごめん。それでその神様はどうしたんだい。」

「ある日、彼は一枚の木の葉を食べたんだって。するとね、この葉は胃に入ると、下に行ったり上に行ったりして、ぐるぐる回ったんだって。まるで胃の中を検査しているかのようね。」

「おもしろい！じゃ、その木の葉は何なの？」

「うん、その時はその木の葉の正体がわからなくてね。それでさらに植物を食べ続けていると、今度はある植物の毒に当たってしまったんだって。」

「それで、神様はどうした訳？」

「やっぱり、神様は頭がいいよね。そこで神様は以前食べたことのある木の葉を思い出して、また食べてみたんだよ。すると、木の葉はまた胃の中でぐるぐる回り、毒をすっかり消してしまったんだって。」

「へえ、すごいね。その木の葉は。」

「神様はね。だから、胃の中を検査するということで、この解毒作用のある木の葉の名前に『査』という名前をつけたんだよ。」

「わかったぞ。それで、いつのまにか『査』が『茶』になってしまったんだな。発音が似ているから。」

「そうなんだよ。どうだい。おもしろい話だろう？」

「そう言えば、お前。日本語でも検査の査と喫茶店の茶は同じ発音だな。これは偶然の一致かなあ。」

干支の由来

毎年師走に入ると、翌年の新しいカレンダー¹が出回ります。そして、カレンダーには、必ず干支の文字や絵が書かれているのです。どうして、十二種類の動物が干支に選ばれたのでしょうか。どうしてライオンや象、キリンなどが入っていないのでしょうか。疑問に思ったことはありませんか。台湾の童話の中にこの干支に関する話しがあったのです。

むかし、むかしのある年の暮れのことです。動物たちは神様から手紙をもらいました。竜もライオンも鼠も蛙もみんな手紙を読みました。

手紙には、

「元旦に、一番早く来た動物から十二番目までを、一年交替で動物の大將にします。神様より」

「わあ、がんばろう」

「よし、おれは負けないぞ。」と動物たちはその日を待っていました。ところが、大晦日になってのんきな猫はいつ集まるか忘れてしまったので、鼠に尋ねました。すると、いたずらな鼠はわざと一日遅らせて「猫さん、あさってですよ。」と騙したのです。

その晩、動物たちはみんな早く寝ました。でも、牛だけは、

「ぼくはのろまだから、早く出かけなくちゃ。」と先に出発したのです。ずるい鼠は、そっと牛の背中に乗りました。

次の日、元日の朝早く、動物たちは出発しました。犬も猿も猪も一生懸命に走りました。でもライオンや象はまだ夢の中。きっと一年の疲れで寝ているのでしょう。まだ起きません。

一番先に神様の御殿に着いたのは牛でした。

「ああ、やっと着いた。ぼくが一番……………」

ところが牛の背中から鼠がピョンと飛び降りて、

「神様、新年おめでとうございます。」と、言ったのです。

「ああ、鼠くんが一番ですね。」

牛は「ぼくが一番なのに。モウ。」と非常に怒りました。でもあとの祭り、仕方ありません。その後、ほかの動物たちが次々と到着しました。

お昼ごろ、神様は順番を発表しました。

「一番は鼠、二番は牛、それから、虎、兎、竜、蛇、馬、羊、猿、鶏、

犬、十二番目は猪！」

蛙は十三番目でした。それで、がっかりして家にカエルことになったのです。神様と十二匹の動物たちはお祝いの宴会を開きました。到着順に行儀良く座り、みんなはうれしくてご機嫌です。

猫は翌日、のこのこと御殿に行きました。すると、門番は「宴会は昨日終わったよ。正月草々から寝正月かい。」と言って、猫を笑いました。猫はそれを聞いてカンカンに怒りました。鼠に騙されたからです。それ以後、猫は鼠を見ると、「こら、鼠！ よくもぼくを騙したな。許さないぞ。」と言って追いかけるようになったというのです。

*いまどきの猫は栄養の取り過ぎと運動不足から足が弱く、鼠を掴まえることができません。また、いまどきの子供もデブちゃんが多く、糖尿病を患っている子もいるとか。豊かな社会の反映なんだろうが、なんとなくかわいそうな気がします。

恩師からの便り

ある日、日本語を勉強している学生から

「先生、以前亡くなった父の遺品からこんなものがありましたよ。」

と言われて、見せてもらったのが以下の手紙でした。封筒がすでに変色しておりましたが、この手紙を読んだ時、感動で胸がいっぱいになりました。廣江先生はかつての教え子から招待を受け戦後二十年を経て里帰りしたのでしょう。教育のありかたや日台関係が問われている現在、私たちはこの手紙から学ぶ点があると思い、全文そのまま紹介させていただきます。

二十年ぶりに、空の上から淡水河の大きな流れを見た時、とうとう帰って来たという感じでした。二つの時から育った台湾、四十年近く住みなれた台湾、私は思わず目頭が熱くなりました。

「とうとう帰って来た私の故郷に」

この感じは一月三十日車の上から守城大山のふもとにひろがっている埔里の盆地を見渡した時、もう一度しみじみと感じたことでした。中学時代、帰省のたびに通った裏南投道路を走って盆地に入ると、子供の時に魚取りに興じた河、見慣れた草や木、精糖会社の煙突、何一つなつかしくないものはありませんでした。そして、孔子廟での感激の再会、ひとりひとり握った手には熱い思い出がこもっていました。盛大な歓迎会、連日の同窓会、温かい故郷の人々の深いお志に、毎日私は泣かされました。時が経っても、国が変わっても、人の心と心のふれあいには、切っても切れないもののあることを思い知らされました。十一日間の埔里での滞在、それは私の第一の故郷での楽しいひとときでした。霧社・水社・北山坑・烏牛欄での心温まる歓迎の集い、水源地への遠足、私の一生にとっていちばん楽しい時を過ごさせていただいて、ほんとうにうれしいことでした。

それから、台中・豊原・員林・南部地方・台北での二週間にわたっての旅行では、思い出深いたくさんの人に会い、厚いおもてなしをうけて、また感激を新しくしました。

皆様の温かい心と、暖かい自然に取り囲まれての二十五日間の生活に、できることならこのまま台湾に住みつきたいとさえ思いました。しかし、

それは許されないこと。皆様の愛情の綱をふりきるように、二十二日私の乗った翠華号は、松山の空を飛び立ちました。私は再びみることができかどうかわからない台湾の山々を下に見ながら
「故郷よ、さようなら。みなさん、さようなら。」
と心の中で叫びながら、じっと目をとじました。
ほんとうにありがとうございました。まごころのこもった記念品とたくさんのお饞別をいただきありがとうございました。お饞別では何かこの旅行の思い出となるものを求めて一生の記念にしたいと思います。
名残はつきませんが、これでお別れします。
どうぞお元気で。

翠華号の機上にて

★筆者からお願い

廣江先生が今なお健在であれば90歳を過ぎているはずです。お住まいは高知市とのこと、どなたかご消息をご存知の方は著者あてにご一報くだされば幸甚です。

第五章 「台中」 紹介

台中の町と歴史

台中は「台湾で一番過ごしやすい所だ。」とよく言われています。それは、台北は雨が多いし、高雄は暑すぎるし、それに比べたら台中はちょうどよく、一年を通じて温暖な気候だからだそうです。これに加えて、市の郊外には穀倉地帯が広がっていて、近郊の水田で年2回収穫される米は日本と同じでおいしいですよ。そしてバナナやレイシやリュウガンなどトコピカルフルーツも豊富に採れる所なのです。

ここ台中平野は、台湾で最も早くから開けた地域。18世紀始めに、たくさんの漢民族が大陸から渡来し、この地に大集落を作ったのです。その後、清朝が台湾を統治した際、台中を省都と定め、市街地の周囲に城門と城壁を築いたのです。以来台中は城下町として栄えますが、まもなく省都が台北に移ってしまい、日本統治時代には城門と城壁がとりはらわれてしまいました。その後、京都を真似て現在のような碁盤目のような整然とした市街地が作られたので、昭和10年ごろは人口7万の「小京都・台中」と当時言われたそうです。

そして1983年の台中港完成を皮切りに近代都市へと大きく変貌を遂げ、今では高層ビル、高層マンションが次々と建てられ、ここ数年の町の変化は目覚ましいものがあります。3年ぶりに台中に遊びにやってきた友人は、ぼくの家に着くと開口一番こう言ったのです。「以前と随分かわってしまったなあ。空き地がなくなったので、道を間違えてしまったかと思ったよ。」

(注)

2010年12月25日に台中市と台中県が合併して新たに政府直轄の台中市となった。台湾屈指の工業都市として急速に発展を遂げ、2019年10月時点での人口は2,813,397人で台湾第2位である。

温故知新

台中駅の 100 周年を祝う慶祝行事が先週行われ、また今月号の市の広報誌「尖亮台中」にも特集が生まれ大きく報道されました。このニュースに始めて知った時に、「どうして今年が 100 周年なの？」と疑問に思いました。と言うのも何年前に同じ聯合報に台中駅が「80 歳の誕生日」と報道していたので興味を持ち、新聞の切り抜き記事を保存していたからなんです。

それで、よく調べてみると、今回 100 周年とあったのは一番最初の駅が建てられてから 100 年ということで、80 周年というのは現在の駅舎が出来てからの年数ということがわかったのです。

今から 100 年前と言えば、日本の年号では明治 38 年のことで、日本が台湾を統治してちょうど 10 年目のことでした。この年の 5 月 15 日に瓦屋根木造平屋建ての駅が開業したのです。当時は駅のことをテイシャバ（停車場）と呼んでいました。

そう言えば、亡くなった父もよく「テイシャバ」と言っていたのを思い出します。

そして、1902（明治 35）年に工事が始まった台湾縦貫鉄道、基隆・打狗（高雄）間（405.9 キロ）が 1908（明治 41）年に全線開業したのです。その全線開通を祝って、台中公園のシンボルである湖心亭で皇族臨席の下、盛大に祝賀会が挙行されたのです。その様子は「50 年の領台の歴史で最大のイベントであった。」と故篠原正巳先生の著書「台中・日本時代の 50 年」の中に記述してありました。

ところで、現在私たちが目にしている駅舎は、その 1908 年に着工し 9 年間の工事のあと 1917（大正 6）年 3 月 15 日に改築されたものなのです。バロック式の赤レンガの外観といい高い吹き抜けといい何となく東京駅に似ていますよ。台中駅の設計者は、台湾で現存する最も古い駅舎である新竹駅（1913 年竣工）の設計者でもある松崎萬長（まつがさきつねなが）氏で、両駅とも町の表玄関の威容を保ち、今風で言うと地元の人々の「ランドマーク」なのです。その後、この駅舎を中心として台中の町は整然とした碁盤目状に作られ当時「小京都」と称されたそうです。

ちなみに東京駅は 1914（大正 3）年に落成。「明治の建築王」と呼ばれていた

辰野金吾氏の設計です。日本統治時代の台湾建築写真及び建築家について興味のある方は下記のHPをご覧ください。

(参考)

(1) 1911年2月には阿里山森林鉄道も開通しており、中華民国が成立したのは、翌年です。

(2) 1920年(大正9年)の国勢調査によると台湾全島の人口は365万人、台中州は77万人、台中市は3万人。

台中駅はこれまで1935年の中部大地震、そして第2次大戦の空襲とたびたび危機にあいました。最も大きな危機は台湾大地震の数年前に台中駅を地下化する という話が出て、日本統治時代に建設された建物が取り壊されるという話が伝わった時でした。でも、その後鉄道文化協会などの尽力で1995年内政部から二級史跡(文化財)に指定され保存されることになったのです。

また台湾に住み始めた当時は市の人口が80万もあるのに駅の数たった1つしかなかったのですが、100万都市になった今では新しく駅が2つ増え、地元住民に大きな恩恵をもたらしています。

皆さんもご存知の通り、台湾の新幹線の開通が近い将来予定されています。在来線で現在4時間40分かかる台北―高雄間がノンストップで、最短83分で結ばれ、台北から台中までは2時間15分がわずか45分に短縮されるということです。

台湾の新幹線は日本のシステムが採用されることになって、日本から多くの工事関係者が台中でも働いています。ただ、新幹線の台中駅は現在の台中駅から西南に10キロ近く離れた烏日(ウーズウ)という所に建設中で、商店や住宅もない平野の中に、巨大な橋脚と宇宙船を思わせる近代的な駅がその姿を見せています。来月には新幹線と在来線がドッキングされ、その記念式典が台中駅で行われることになっています。

運賃が高い上に、市街地まで乗り換える必要があるため、台中での利用者は少ないだろうという声もある一方、新幹線に期待を寄せている人も少なくありません。

きっと開業時には大フィーバーすることは間違いないでしょう。

駅舎の時計は、次の新たな 100 年に向かって、休むことなく時を刻んでいます。
明治の先人が残してくれたすばらしい台中駅が永遠に台中市民のランドマークで
ありつづけることを願っています。



台中公園

台中のシンボルといえば、まず台中公園です。というのは池の中心にある湖心亭（以前は双閣亭と呼ばれた）は2つの三角形屋根から出来ていて、この写真を見たら、誰でもが「あっ、ここは台中だ。」とわかるのです。



その台中公園が出来たのは今から 100 年前のことです。それで市では今月 25 日から来月 4 日までを「台中公園 100 周年行事」を行うことにしています。

台中の歴史に造詣の深い人の一人に篠原正巳先生 がいます。今から 7 年前の 1996 年に先生が出された本「台中・日本統治時代の記録」の中に、台中公園について次のように記述してあります。

『明治 36 年（1903）3 月 8 日、市民有志によって台中公園の建築と

北門樓の保存が協議された。公園敷地として大墩丘陵の砲台山と周辺の旧墓地（2万6千坪余り）が選ばれた。三角測量の起点は今も公園内に保存されているが、砲台山は海拔98.4mの丘である。当時丘の周辺は池や沼が多く一面の湿地帯であった。いたるところに刺竹の藪があり、丘にはあぜ道伝いに湿地を避けながら、ようやくたどりついたという。公園はこの年の10月28日に開園したが、明治41年（1908）縦貫鉄道全通式の式場選ばれ、大々的な改修がおこなわれた。4160坪の池は自然の池沼を利用し、人工的に造成したものである。現在の池亭（双閣亭）は41年に建築され、当時台湾八景の一つと称された。市の競技場ができなかった時代、池の周りにはグラウンドが造られ市民運動場として使用された。台中公園は台中市の象徴として今も市民に親しまれている。』

（篠原正巳著『台中、日本統治時代の記録』より抜粋）

** 台中神社 ** :

台中に住んでいる人で台中公園を知らない人は皆無ですが、公園内に神社があるかどうか尋ねると、ほとんどの現地の人は知らないようです。日本統治時代に関心を持って資料や写真などを収集している（ぼくのような）風変わりな人以外には見向きもされない場所にあるのです。公園路の入り口から入って、すぐ右手の方向に歩いていき正面に図書館の建物が見えたら、そこが神社跡なのです。昔は参道だったところを歩くと右上写真の所に行き着くのです。テニスコートを右側に見たら立て看板に台中神社の写真つきの説明文がありますので、興味のある人は参拝がてらに訪れてみてください。

神社の中央に孔子記念像がありますが、これは1973年に日台双方のライオンズクラブが寄贈したもので、もともと日本統治時代の神社跡なのです。だから、現在の孔子記念像の台座をはじめ銅馬、狛犬はすべて台中神社の遺跡にほかならないのです。

太陽餅

台湾土産の定番のお菓子と言えばパイナップルケーキ（鳳梨酥）が挙げられますが、「太陽餅」（タイヤンピン）は台中の名物なので、それなりの台湾通にしか知られていないようです。というのも日本からの旅行者が多く訪れる台北では入手しにくいのです。

それで、本日は皆さんに「台中と言えば太陽餅、太陽餅と言えば台中」と言われるくらい有名なお菓子を紹介します。太陽餅はいわゆる日本の餅とは違い、掌の大ききの丸い形をした中国式のパイです。さくさくとしたパイの中に透明の麦芽糖の餡が入っていて、とても人気のあるお菓子です。

太陽餅は、自分で食べるより台中の「お土産」として買って帰るのが圧倒的に多いのです。その証拠に、台中駅前周辺や台中の中心部から高速インターに向かう場合、（車は右側通行ですから）道路の右側にずらりと「太陽餅」「太陽堂」の看板が並んでいるのです。

また太陽餅発祥の店のある自由路界限は太陽餅の超激戦地。老舗の太陽堂があまりにも有名なので、太陽餅を売っている店は例外なく「〇〇太陽堂」の看板を掲げているのです。市内には太陽餅を売っているお店の数は100軒とも200軒あるとも言われているのです。

ガイドブックを片手にした日本人観光客は太陽堂と書かれた看板を見たので、本の中に紹介されてある太陽餅発祥の店だと思い込み、半信半疑に「ここは太陽堂ですよ」と聞いたら、店員は澄まして「ええ、ここは太陽堂ですよ。お客さん。」と答えたそうです。

日本でもよく三越やトヨタの有名な会社の名前を利用して商売している会社がありますよね。事実太陽堂の知名度を利用した方が、お店にとっても売り上げが伸びるし、お客さんにとっても安心して買って帰るのだそうです。

太陽餅は一口食べると「皮がボロボロ崩れてきて食べにくいよ。」と、言ったらおばあさんは「今の人は食べ方を知らないのね。昔はそうやって食べるんじゃなかったのよ。正しい太陽餅の食べ方はね。ミルクをあたためて、その中に太陽餅を入れて食べるのよ。とってもおいしく食べれるから、そうやって食べてごらん。」

ウソじゃないから。」と教えてくれたのです。

太陽餅の食べたことのある皆さん、こんな食べ方があるのを知ってましたか。

「胃の中に入れてミルクにつけようと、つけまいと同じだよ。」なんて言わないで、人生の先輩の話を聞いて今度食べる時はあたたかいミルクの中に入れて食べてみましょう。

●台中は太陽餅だけでなく、一世を風靡したタピオカ入りパールミルクティ（珍珠奶茶）やシェイクティ（泡沫紅茶）の発祥地でもあるんですよ。

秋祭り

台湾には日本人学校が台北、高雄のほか、ここ台中と3か所あります。台中日本人学校（以下：台中校）のグラウンドで毎年10月になると日僑協会主催の「秋祭り」が行われるんです。

台中に住んでいる日本人が楽しみにしている行事です。地元台湾人と日本人の交流の場として年々盛んになってきています。グラウンドの中央にやぐらが生まれ、日本人は揃いのハッピーや浴衣姿で参加するのです。太鼓、おみこし、うちわなどお祭りのキーワードを並べるだけで情景がわかるでしょう。年齢、服装、国籍など関係なく参加者はやぐらを中心として輪になって東京音頭と台中音頭と炭坑節などをメロディーにあわせて踊るのです。日本の盆踊りと何らかわりません。台中音頭は運動会の時も踊っている台中校の名物踊りです。おもしろい歌詞なので紹介しましょう。

1 東シナ海 飛び越えて やってきました 亜熱帯
やしの木揺れる 台湾で 作る思い出 宝物
林さんバスで 朝が来て交通地獄も
没関係（メイクアンシー）
ポポモフォダタラナ 何のその
ぼくらは小さな地球人
ニイハオ再見（ツアイジェン） 明天見（ミンテンジェン）
台中音頭でヨヨイのよい

注：没関係は「かまわない」の意味で、ポポモフォ ダタラナは中国語の発音記号で、日本語の「あいうえお」英語の「abcd—」にあたります。明天見は「また明日」の意。

2 グリーンスネークニシキヘビ
木登りトカゲもこんにちは
シャンジャオ揺れる 丘の上 あがる喚声 水しぶき
焼け付く鉄棒 にぎりしめ地球くるっと 逆上がり
雪の降らない 台中に 熱い僕らの 汗が降る
ニイハオ 再見（ツアイジェン） 明天見（ミンテンジェン）
台中音頭でヨヨイのよい

注：シャンジャオ（香蕉：バナナの意味）

3 パパはゴルフで ママテニス 僕らは土曜の模範街
輪投げ パチンコぶんぶんぶん
夜店は子供のパラダイス
ぎょうざ 肉まん牛肉麵 味は一流安いんだ
台中よいとこ 一度はおいで
ない物以外は みんなある
ニイハオ 再見（ツアイジェン） 明天見（ミンテンジェン）
台中音頭でヨヨイのよい

この日は地元の高中生や大学生もたくさん来ていました。周囲には学年ごとの模擬店や屋台が出店し、とても賑やかでした。年齢、国籍、服装すべて没関係。クライマックスは最後に花火が打ち上げられた時です。日本人の誰もがしばし異国にいることを忘れ、花火を見ています。そして花火の打ち上げが終ると「ああ、ここは台湾だ」と思い知らされるんです。そして台湾の長い夏はこの日を境にすっかり過ぎ去ってしまうのです。



台日会（台日交流聯誼会）

本会は台湾と日本との歴史的な緊密関係にかんがみ、双方の相互理解と友好親善のために、台湾人と日本人の草の根による交流することを目的として創立された団体です。本会は1996年11月2日に当初「日本語聯誼会」として発足し、1999年10月17

日に「台湾中部地区聯誼会」（台中会）と名称変更しましたが、2005年1月1日より「台日交流聯誼会」（台日会）に改称し、再スタートすることになりました。私どもの会員は日本人が10数名、台湾人が20数名おります。会員の年齢は20代から80代までと幅広く、その職業も議員さん、大学教授、高校、中学、国民学校の先生方から公務員、会社員、退職者、家庭主婦、学生さんなどと多岐にわたっています。現在会長は置かず、総幹事が代行しております。

また会として「宝島台湾」「歌集ともしび」「台湾の諺」「生活情報ガイドブック」「ガジュマル」などの出版物があります。会員の入会資格は、本会の趣旨に賛同し、台日交流親善に協力したい者であれば、国籍、住所や性別、職業を問わず、入会前に本会の事務局長または会員二人の推薦を受けたものは、入会できます。但し、入会金（一回限り）と年会費（毎年一回）を納入することになっています。しかし自己の利益の為に会員を利用する考えの者はお断り致します。

本会の月例会は、原則として毎月第二土曜日に一緒に昼食を食べ午後一時から三時ごろまで、台中市内で開催しております。

主たる活動は月例会のほか、誕生会、お茶会、カラオケ、懇親会、読書会などで、年末には忘年会が行われます。

（注）2019年1月の忘年会を最後に台日会は解散しました。春節以降は「臺中伍圓の會」

として再スタートしています。

第六章 特別編

海角七号真实版

** 海角七号真实版 **

2008/11/01



台湾映画「海角七号」は台湾中を席卷する大ヒット作品となり、これまでの挨拶言葉「ごはん食べた？」が巷では「もう海角7号見た？」となったとか。海角七号とは、昭和20年12月に台湾から引き揚げた日本人教師が台湾の女生あてに出したラブレターのあて先で、この教師が亡くなったあと娘さんが遺品を整理している中から手紙を見つけ、60年の歳月を経て台湾に届いたこの手紙をもとにした作品です。

(日本でも上映されるかも知れません)

この映画を見て島崎義行先生から以前頂いた「我愛汝無汝我愛死」の文章はまさにこの「海角七号」の映画の話ではなく、本当にあった物語として、また先生の終世の念願を叶えさせあげたいために、過日自由時報新聞社に駆け込み、それが今週水曜日(29日)に大きく報道されたのです。

では「我愛汝無汝我愛死」の全文を(プライベートで公開できない部分を割

愛して) 皆さんに紹介したいと思います。

●我愛汝無汝我愛死

島崎義行

九月も半ばを過ぎると、常夏の島台湾にも、秋の到来を思わせるウロコ雲が、澄み切った空の上空にひろがり始めていた。この空をつい一月程前まで、毎日、比島基地を発進した双胴のロッキードP 38 ライトニングや、コンソリデーテッドB 24 リベレーターが飛び回り、所かまわず爆弾を投下したり、超低空で機銃掃射をしていたことが遠い過去の夢をみているように思えてならなかった。

私は、今日も、青茶色の国民服に下駄ばきという恰好で、昭和国民学校に出勤していた。学校の屋根瓦は、一枚残らず爆風でめくれ上がったままで、殆ど使用されなかった校庭の地上退避壕が、夏草におおわれていた。北側の校舎の柱には、無数の爆弾の破片が突きささったまま、錆つきはじめていた。

九月に入ると、学校は中華民国政府に接收され、五十嵐校長はじめ日本人教職員は、数名の留用者を残し解職された。私は留用教員の一人として残ることになった。光復後の初代校長として赴任して来たのは、台中師範講習科の先輩、昭和二年卒の邱水鏘氏であった。邱氏は教諭から一躍、光復後の初代校長を命ぜられた責任の重大さの為か、いつも、緊張した面持ちで笑顔を見せることは殆ど無かった。悪夢の太平洋戦争は終わった。皇国の勝利を固く信じて疑わなかった私は、敗戦のショックで、虚脱状態からなかなか脱し切れなかった。留用となり出勤はしても、毎日これから先の待ち受けている運命を考えると、暗い気持ちにならざるを得なかった。

疎開して、散り散りばらばらになっていた児童は、八月十五日に戦争が終って一ヶ月たっても、なかなか登校して来なかった。昨日一人、今日二人、と言う具合に徐々に増えて来たが、まだ半数に満たない有様だった。朝会は、終戦前と同じく、「整列」、「前へ並へ」、「気を付け」、「休め」と、日本語の号令がかけられ、児童たちは、日の丸に代る青天白日旗を見上げながら、三民主義の歌をぎこちなく斉唱した。

台湾人の邱校長をはじめ、児童は勿論、誰一人北京語を知らないのだから、なんともちぐはぐな朝会になるのは、止むを得ないことだった。授業は、算数、理科、体育だけで、国語、地理、歴史の授業は禁止、午前中で授業は終了し、児童は下校していった。午後になると、校舎や校庭の後片付けで時間を過ごした。

昭和国民学校には、女の子の給仕が二人いた。二人とも、昭和の前身校、幸女子公学校の卒業生で、年上の方が、十六才の陳明珠であった。明珠は先生方から

「明ちゃん」の愛称で可愛がられていた。幸公でリレーの選手だった明珠は、すらりと均勢のとれた肢体をしており、切れ長の眉、つぶらな澄んだ瞳、首まで伸ばしたお河童の髪が良く以合って、戦後のアイドル歌手の一人、山口百恵にそっくりであった。

明珠が、いつ頃から私に好意に似た感情を持ち始めたかは知らない。

昭和十九年四月、台中市の西方郊外の大屯郡西屯国民学校から、新設の台中市昭和国民学校（注）に赴任してから、二ヶ月程経ってからのことであった。毎朝行われる職員打ち合わせの時、どういう訳か、今まで何時もいちばん先に五十嵐校長にお茶を注ぎに行っていた明珠が、突然私のところに先にお茶を注ぎに来た。一瞬、これは何かの間違いでないかと私は思った。上席の新盛先生はじめ、年配の先生方は一様に呆気にとられた面持ちで眺めていた。その日以来、明珠は毎日いちばん先に、私のところへお茶を持って来るようになった。明珠がお茶を持って職員室に入って来ると、一齊に先生方の視線が彼女に注がれた。彼女は、自分に視線が集まっていることに、全く気が付かないかのようにごく自然に振舞い、私の前にお茶を注ぎに来た。

ある日、私は湯沸し場にいた明珠に向かって、「明ちゃん、いちばん先に私にお茶を注ぐの止めてくれ、校長先生に先に注ぐのがあたり前だろう。」と言った。すると明珠は、可愛らしい唇をちょっと尖らせて、「わたし、先生にいちばん先に、お茶を注いでどうしていけないの。」と、不満そうに言った。私はそれ以上何も言えず、黙って明珠のほんのりと紅潮した顔を見つめた。

八月十五日、運命の日が遂に来た。長い長い戦争は終わった。満州事変以来、唯ひたすら、皇国日本の勝利を念じて来た私は、完全に打ちのめされた。そんな中にあっても、明珠は一日も休むことなく出勤し、お湯を沸かし、空席の目立つ職員室のテーブルを拭き、打ち合わせの始まるのを待っていた。

今日も、授業らしい授業を受けることもなく、登校して来た十数名の子供たちは午前中に帰って行った。私は、別に誰からも指示された訳でないが、午後から宿直室の後片付をはじめた。つい此の間まで、学校に宿営していた陸軍通信部隊が引揚げた後、残して行った通信機材が到る所に散乱していた。この部隊は関東軍から比島戦線に投入される筈の精鋭部隊であったが、輸送船は無くなるし、間に合わなくなり、台湾にそのまま残ることになったのだ。

突然「先生」と、明珠の弾んだ呼ぶ声が聞こえた。「こっちに来て」と、手招きされるまま湯沸し室に入ると、明珠は、蒸し立てのさつま芋を皿に盛って差し出してくれた。このさつま芋は、雨天体操場の東側の学校農園に、私や宮坂君が春先に児童たちと植えつけて置いたものだった。

「ああ、おいしい、明ちゃん有難う。」

「先生、こんな言葉知っている。」明珠は、ホオを少し紅潮させながら突然「我愛汝無汝我愛死」と一語ずつ、はっきり私に言い聞かせるように言った。「うん、初めて聞いたが意味は分かるよ。私は貴方を愛している。若し貴方がいなければ私は死にたい。つまり、死ぬ程貴方を愛していると言うのだろう。」

「我愛汝無汝我愛死」と台湾語で暗誦してみせた。

「そう、その通りよ。先生の台湾語台湾人と同じ、とても上手よ。」と、にっこり頬笑んだ。

「そう、そんなに上手かなあ—。もう少し台湾語しゃべってみようか。」

「鮒（チツラア）、鯉（タイヤアー）、鯰（リヤマー）、鰻（モアー）、ハヤ（ケーコアー）。」と、知っている限りの魚を台湾語で言った。

「どうしてそんなに知っているの。」

「うん、生まれた所が埔里だし、小学校二年生の時も、土牛の台湾人の家に間借りしていて、遊び仲間は、全部広東人の子供だったから、誰も日本人の子供と思わなかったよ。」

「そうなの、先生、これからどうするの、日本に帰るの。」

「さあ—、どうなるか—自分でも分からないよ。だいいち 地に帰る所も無いし—」

「そんなら先生、帰えらないでいいでしょう。台湾語上手だからこのまま台湾に残った方がいいよ。」

実際、その頃の私にはこの先どうなるか、判然とした見通しは全く無かった。数日後、私は明珠を誘って映画を見に行った。明珠は薄化粧をし、唇には紅が塗られていた。素颜でも色白で膚が綺麗なのに、化粧して来た其の顔は少女のそれではなく大人の美しさを匂わせて魅力的であった。

映画館には、日本人の観客は殆ど見当らなかつた。台湾人に報復された話があちこちから伝わり、夜間に外出する日本人はいなかつた。私と明珠は、いちばん後の高い座席に腰を下した。どんな映画だったか、殆ど記憶が残っていない。覚えているのは、周囲の台湾人の視線が、みんな私と明珠に向けられていたことである。「何でこんな台湾人の美少女が敗戦国の日本人青年と、一緒に映画を見に来ていんだろう……。」と、思っているに違いないと思いながら、スクリーンに眼を向けていた。映画が終りそうになった時、明珠に「出よう。」と声を掛け、静かに、そして足早に映画館を出た。秋の夜風がひんやりと流れ、星が美しくきらめいていた。いつの間にか、私は明珠の手を握っていた。柳川の橋を渡り楽舞台の前まで来ると、明珠の家は間近い。私は、明珠の家がもっと遠ければいいのにと、まっすぐ来てしまったことを後悔した。このまま別れるのは惜しい気がしたが、今の自分には全く将来の展望が無いし、彼女はまだ十六才の少女なのだ。愛してはいけないのだと、自分に言い聞かせ燃えかかる胸のときめきにブレーキをかけて、

「さよなら、お休み。」と言って、そのまま家へ帰った。

あれから四十三年、突然の引揚げで、別れの言葉を残すことも無く、日本に帰国

させられた私は、無縁の地仙台に住むことになり、古稀を過ぎた。だが、明珠のことを一日も忘れたことはない。未だに明珠の面影を追い続けている。引揚後四回台湾に行ったが、そのたびに明珠の消息を尋ね回った。だが誰も知っている人はいなかった。澄み切った青空に南風の吹く日、遙か台湾の方に顔を向け、眼をつぶると、「我愛汝、無汝我愛死」、明珠の可憐な姿が幻のように浮かび、やさしい声が切なく聞こえてくる。

注：昭和国民学校の前身は幸公学校で、戦後は篤行国小と改称されました。

●先生は台中師範（現、台中教育大学）の卒業後終戦前後までの台湾人の子弟の通う公学校の先生をしており、この文章は20年前に書かれたものです。知人から招待を受け台中師範創立80周年記念（2003年）に参加したことがきっかけでそれ以来お付き合いさせていただいており、その後先生から頂いたこの前述の文章をはじめ「教官殿」「新高山登山」「望郷」など原稿数編を『遙かなる故郷』という一冊の冊子にまとめて贈呈したりしてきました。

先生は「今住んでいる仙台は妻の故郷であって、私の故郷ではない。私の唯一の故郷埔里の水源地の川に、骨の一部を流してもらおうよう台湾の生徒たちに依頼している。」（望郷より）と語っていて、いつも南の空を見つめつつ脳裏には台湾で過ごした日々が走馬灯のごとく浮かんでくるんだそうです。

心臓病の持病をかかえ年齢も90星霜を数えた先生が、唯一ずっと気にかけている明珠さん～今なお健在であれば80歳のおばあちゃん～の消息を知らせてあげたく、先生に断りなく独断で知り合いの新聞社、ラジオ局に協力を要請した結果、新聞には「海角七号真実版」として一面割いて大きく報道されました。そして来週末にはFM毎日放送でも特別番組を組んで放送されることになっています。今回の報道で台中市や母校の篤行国小でも全面的に協力してくれており、一日も早く明珠さんの消息がわかったらいいなあと念じている昨今です。

すると、その後先生から「私の知っている明珠は若き日の彼女で今の明珠ではない。もう探さないで。どうかそっとしておいてほしい」と手紙があったのです。「私は余命いくばくもないので美しい思い出のまま旅立ちたい」とのことでした。

台湾版五体不満足

(はじめに)

本稿の原文は中国語で書かれた「很值得看的真人真事」の文章です。
これを日本語グループ「友愛会」の張文芳会長が翻訳してくれたもので、
内容があまりにも素晴らしいので、皆様方にもご紹介したいと思います。

** 台湾版五体不満足**

「困難に遭った時、私は打ちのめされるのではなく、方法を講じて

解決します」

南投県山間地の田舎に、阿潭（あたん）という名の男の子がいました。彼は
3歳の時、小児麻痺に罹り、それから立つことも歩くことも出来なくなりました。
この子は鰐のように胸部を地べたに臥せて這うことしかできないので、
膝、すね、足の甲はいつも擦り破れて血だらけ、多くのあばたが残っていました。

7歳になったころ、父親は彼に両手を使い、靴を引きずって歩くことを教えました。
考えてみてください。阿潭が手で靴を引きずって地べたを這っていると、
人たちはきっと好奇的な目で彼を見るはずです。

しかし、阿潭は卑屈になることはなく、微笑みで応えるのでした。子供が
7歳になると小学校に上がる歳ですが、母親は阿潭が学童たちから嘲笑わ
れたり、虐められることを恐れ、彼を入学させようとしませんでした。

9歳になった時、教育熱心な校長先生の提案で三輪車を1台購入し、全校の
学童たちに協力を頼み、阿潭を乗せた三輪車を押して登下校させることに
しました。

でも雨が降ったらどうする？ ある日土砂降りの大雨の中、三輪車は山道の
泥濘にはまり二進も三進も行かなくなり、動きません。学友たちは皆その
まま立ち去りました。阿潭の涙は雨水と一緒に流れるだけ、姉もそばで

恨みごとをこぼすだけです。こうして六年が過ぎましたが、天は努力する人を見捨てませんでした。

阿潭は西嶺国民小学（小学校）を1位の成績で卒業したのです。でも、又問題が生じました。山間地には中学校がないのです。

阿潭は「僕はこれからどうすればいいの？」と父親に聞きました。

父親は多くの人たちに意見を請いました。ある人は「靴磨きをさせたらいいだろう」と言うかと思うと、「この子は『廃人』だ。勉強なんかさせる必要も、仕事を学ぶ必要もないから、どんぶりでも上げて駅で地べたに臥せて乞食にならせたなら、人様が小銭を恵んでくれるだろう」という酷い提案をする人もいました。

それを聞いた阿潭は情けない思いで、付近の木陰に行き、「嫌だ！ 嫌だ！ なんかじゃない！ 僕は廃人にならないぞ！ 乞食なんかになるもんか……」と泣きながら大声で叫んだのです。

その後、小学校の隣に国民中学（中学校）が立てられ、阿潭は嬉しくなって、何日もうれし泣きしました。彼は「これは神様が僕の祈りを叶えて下さったんだ。神様は僕を決して見捨てない」と神様の存在を堅く信じたのです。

このため、阿潭は勉強に一層の努力を注ぎ、3年後、又もや1位の成績で鳳鳴中学を卒業したのです。正に、「天は自らを助けるものを助く」で、自ら雄々しく自立し、敢えて運命に向かって挑戦する者は、即ち巨人なり！「困難に遭った時、私は打ちのめされるのではなく、方法を講じて解決します」と阿潭の口癖です。

阿潭は「劉大潭」という氏名で、彼はその後台中高工、逢甲大学機械工学部に進学し、何れも1位の成績で卒業を果たしたのです。彼の確固たる信念と毅力は、あたかも『恩に感ずる心』という歌の歌詞に「私は天に向かって誓う、私は絶対に負けない！」と同じように、求職活動の過程で、劉大潭は100社以上の会社・商店から悉く断られ、甚だしきに至っては、守衛から門前払いされる始末、それでも最後にはある工場が「試用」を条件に彼を採用してくれました。

劉大潭は報酬の多寡を問わず、仕事に全身全霊を打込み、無償で残業をやり、他人が一つだけの案を設計するのに対し、彼は残業で5、6種もの設計を行い、社長の選択に提供しました。このような献身的な仕事ぶり、と真剣な態度は、大いに社長の賞賛を勝ち取り、阿潭を班長から設計課長に、そして研究開発部長にまで昇進させ、全社最高額の給料を得る

までになりました。

その後、劉大潭は書道塾で才能ある美しい少女と付き合うことになり、相思相愛の仲になりました。当然、少女の父親は誰が何と言おうと、大事な娘を「手で歩く」男に嫁入りさせるはずがありません。

劉大潭は勇気を奮って、恭しく「義父となる可能性」の少女の父親に対し「僕は足が不自由な以外、体は健康で、品行方正、そして責任感もあり、現在設計課長の給料もいたって安定しております。

何より重要なのは、僕はあなたの娘さんを心から愛しています……」と述べました。一晚中話し合いの結果、未来の義父はとうとう2人の結婚を承諾したのです。

今では、劉大潭は花のような美貌の妻と、3人の可愛く綺麗な娘に恵まれています。しかも劉大潭は自分でも創業した「速跑得機械公司」の社長にまで成功したのです。

彼は15年前の事を話してくれました。ある日、彼は「這って」自動車の展示会場に向かいました。現場にいた5、6名の営業マンは彼の異様な姿を見ると、物乞いか、乞食がやって来たと思い、彼を避けて遠ざかりました。この時、劉大潭は展示場の女子職員に「車を買いたいのですが！」と声をかけたが、誰も相手にしなかったばかりか、そばで人を小バカにしたようにクスクス笑っているのです。

翌日、彼は再び新車展示場に「這い」込みましたが、そばには銀行の支店長が付き添い、持参した「60万円」の札束をテーブルの上に置きました。その時、唾然とした営業マン達は、慌てて態度を豹変、恭しくお茶や一ヒールのおもてなしを始めたのです。支払いを済ませた彼は、持参したケースから、やおら工具と部品を取り出し、スチール棒をネジ回ジ回しでアクセルとブレーキに取り付け、「手を使って」運転操作できるように部分改造を行ったのです。30分後、劉大潭はその新車を運転して会場から立ち去りました。現場にいた6、7名の営業マンは只々その経緯を瞠目し、驚き入るだけでした。

劉大潭の長年来の友人、広告界の才子范可欽さんは、「歩く姿は犬のようだが、生活は龍のようだ」と彼を批評しました。

歩く姿は犬のようだが、運命に翻弄され、幼い頃から只両手を使って萎縮した両足を引きずって匍匐前進するのみでした。他人の異様な、好奇心眼差しに晒された彼は今、永遠に百獣の尊「龍」の如く闊歩し、自身の不具については些かも卑下する心を抱かず、自信に満ちた微笑を以ってすべてに対面したのです。

劉大潭の自信は、彼の專業上の抜群の表現に基づいていました。彼と30年余りも付き合っている友人曾壽塘は彼を次のように評価しました。

「目で見ることが出来、頭脳で考え付く物なら『教授』（劉大潭を指す）は、何れもコンピュータを用いて、3D立体図を書くことが出来るのです」彼をよく知る友人は誰もが彼の事を「教授」と呼んでいます。彼の研究開発のエネルギーは、本物の大学教授と比べても、決して遜色はありません。今までに彼が取得した特許は200件近くに達しています。

20年前、彼はテレビのニュース番組で、7、8人の大学生が火災中に焼死した報道を見て、非常に心を痛めました。

ある日、彼は1匹の蜘蛛が葡萄棚から垂れ降りるのを見ると、あるアイデアが浮かび、直ちに家かけ戻り、「蜘蛛高層ビル緩降機」を設計、具体化した装置を窓につるして試してみると、素晴らしい効果を挙げたのです。

特許を出願し、許可されました。

その後、国外の発明競技展に出展、見事金メダル賞を勝ち取りました。

又ある日、円山グランドホテルで会議に参加していた連戦氏がエレベータの故障で2時間もエレベータ内に閉じ込められたニュースを見て、彼は「停電あるいはエレベータが故障した際、一階まで安全に降下」できる安全レベータを発明しました。この発明は又もや速やかに特許権と金頭脳賞を獲得したのです。

お分かりでしょうか？ 劉大潭の発明は数え切れないほどありますが、彼の一生のうち、もっとも良かったのは「廃物利用」だったと彼は言っています。元々、彼の身体はすでに廃物だったのを、彼自身の堅持で「自分を正しく評価」し、決して諦めず、残された頭脳と両手を存分に利用したため、1人のトップクラスの発明家に成長したのが、彼の言う「廃物利用」なのです。

彼は曾て「全国発明展第1位、ゴールデン頭脳賞」に輝き、これ以外にも「スイス・ジュネーブ国際発明金メダル賞」、「ドイツ国際発明金メダル賞」、「国科会十大傑出ハイテク人材賞」、「文復会ハイテク総統賞」、「經濟部中小企業クリエイティブ研究賞」……生涯に無数の賞を彼は見事に勝ち取っています。

同時に、彼は全世界で第1位の「障害者発明家」でもあります。

劉大潭は「ここ数年来、手に入れた金メダルは『1キログラム』を超え、賞金は200万元（約US \$ 66,700.00）をオーバーしました。私の人生目標は『金メダル5キログラム、賞金500万元』です」と豪語しています。

曾ては一生乞食に成り下がるしかない馬鹿にされた赤貧の子供が、己の知恵に頼り、決して運命に屈しない毅力の持ち主・劉大潭は、今や、身代数千万元の企業家に大変身、成功したのです。



後日台日会の月例会で劉さんはこれまでの自分史を語ってくれました。
その席上、この本を会員に紹介したのです。中国語で書かれているので、
多くの台湾人にとって大変役に立つ本です。



白冷圳

(1) 白冷圳誕生 80 周年 新社台地に根付いた友情
「盧千恵のフォルモサ便り」]

先日、江口克彦先生を団長に、みんなの党の 8 人の方たちが、台湾訪問の忙しい時間を割いて、台中へお見えになるとの連絡がありました。満里子ポワンボフ・フランス駐台湾代表夫人が、著書『Taiwan 楽しいサプライズ!!』の第 1 行目に「台湾には故宮博物館しかないと思っている?」と問いかけていますが、わたしも同感です。

台中市内には、緑濃く水の清い台中公園や、やさしい微笑をたたえた大弥勒菩薩のある宝覺寺などがあり、郊外には楽しい学習のための霧峰地震公園があります。

この度、先生方には台中の新社地区に大きな貢献をしてくれた磯田謙雄(のりお) 技師を紹介するため『白冷圳』をメインに選びました。

◆大規模な灌漑工事

台中の新幹線駅から、50 分ほど郊外の道を車で走ると、白冷圳のある新社台地に到着します。「圳」というのは、土辺に川をつけた珍しい字で、「田んぼのほとりの溝」と、台湾の辞書に出ていました。

この新社は高台にあり、気候が涼しく、病虫害も少ない農耕地ですが、雨水だけに頼る乾燥畑でした。砂糖の輸出が台湾の経済を潤して以来、台湾総督府は「文化の高低は砂糖消費の多寡によって知られ、糖業の消長はサトウキビ苗の優劣によってきまる」と、サトウキビ苗床に適しているところをさがし、この新社が茎の太いサトウキビの苗作に適しているとの調査報告を受けました。

嘉南大圳、烏山頭(うさんとう) ダムを設計し作り上げた八田(はった) 与一技師(1886~1942 年)と同じ金沢出身、その工事にもたずさわった

磯田謙雄技師が、新社の奥山、八仙山に沿って流れる水量豊富な大甲溪から取水して、814ヘクタールの土地を灌漑（かんがい）する企画設計をしました。

1927年、当時の日本帝国議会で145万円（今の55億円相当）の予算が通り、翌年工事が開始されました。22のトンネルと14の水路橋、さらに、大甲溪中流の白冷台地と新社台地の高低差（22.6メートル）を利用して、水を移動させる3つの逆サイホン装置も作りました。地形の変化を使い、電気などの動力を一切使わない送水路が出来上がったのです。

日本から船で運ばれてきた鋼鉄の送水管は、直系1.2メートル、鋼壁1.2センチの立派なもので、同行した若い教授が、当時の日本の鋼鉄技術の高さに感心していました。白冷圳の工事は1932年に完成しました。

1999年の大震災で、山に変動が起こるまで、68年間絶え間なく、新社地区に灌漑と生活用水を送りこんできたこと、台中の農田水利局の幹部は誇らしげに、自分の身内のことを話すように、日本の国会議員に話していました。

工事にたずさわった日本人は簡素な宿舎に住み、台湾人と一緒になって、堅固で品質の高い基礎工事を行ったと証言を残しています。

◆生活に密着した用水

大震災で、白冷台地と新社台地が同じ標高554.99メートルにまで盛り上がり、逆サイホンが使えなくなりました。そのときになって、3万人の住民は、当たり前のように使っていた白冷圳から流れてくる水が、どれほど、自分たちの生活をうるおしていたかを再認識したのです。

若い人たちは「おいらが村」の歴史、文化を研究し始めました。夫の許世楷は、「金沢の有名な兼六園を訪れたとき、近くの川から園内の霞が池に貯められた水は、さらに逆サイホンの道理を使い、すぐそばにあるお城に用水として引きこまれていたのだと、説明を聞いたことがあるよ」と、若い人たちに話し聞かせていました。

わたしも、磯田技師が新社の台地にたたずみ、故郷の兼六園と金沢城を思い浮かべている姿を想像しました。

大震災の後、毎年、通水が始まった10月14日には記念会が持たれるようになりました。朝早く村人たちは大人も子供も、夜のお誕生会の前祝いに白冷圳の清掃をしました。

特に、今年は白冷圳誕生 80 周年になりますので、磯田謙雄技師についての記念碑を建立したいと、新社の人々に碑文のための資料探しを頼まれました。金沢出身の岡田直樹・参議院議員にお願いしたところ、詳しい資料が金沢大学に留学中の金湘斌さんを通して送られてきました。

旭川観光大使の藤見尚子さんが、「磯田さんが新社の地に残したものと、それを大切にしてくれている台湾人の気持ちを日本の人たちに知ってもらいたい」と、話していたのが心にこだましています。



盧千恵 許世楷・元台北駐日經濟文化代表処代表の令夫人。1936 年台中生まれ。60 年国際基督教大学人文科学科卒業後、国際基督教大助手。61 年許世楷氏と結婚。夫とともに台湾の独立・民主化運動にかかわったことからブラックリストに載り帰国できなかった。台湾の民主化が進んだ 92 年に帰国し、2004 年～08 年、夫の駐日代表就任に伴って再び日本に滞在。夫との共著に『台湾という新しい国』（まどか出版）がある。

(2) 白冷圳通水式 80 周年記念式典



今年白冷圳ができて80年という佳節にあたり、設計者の磯田技師の御遺族関係者をはじめ金沢市から市議員、民間団体、土木関係者など50数名、また台湾側では地元関係者を始め来賓として亜東関係協会の廖了以会長、徐副市长、地元国会議員など多数参列された。

会場となったのは2号サイホンの真下でアンニーレストランとは目と鼻の先。式典の初めに日台双方の来賓の紹介があり。その後今回の式典を記念して磯田技師を顕彰するモニュメント（故事牆）の除幕式が行われた。磯田技師の一人娘である松任谷良子さんは「父は台風が来るたびに心配だと言って工事現場を見に行ってた。父の仕事が台湾の皆さんに役に立っていることに誇りに思うと同時に、皆さんにこのように大切に守ってしてくれることに対し大変感謝している。毎年家族を連れて参加したい。」とあいさつ。良子さんは今年で84歳。そして足が不自由で車椅子なしでは移動できない身、どうかいつまでも健康で台湾に里帰りしてもらいたいものである。またそばにあるアンニーレストランに行く途中の橋が台日友好の懸け橋と名付けられていた。



(磯田技師の親族一同、前列右は松任谷良子さん)

あとがき

1998年に『見た！ 聞いた！ 知った！ 台湾見聞録』を発行しました。平易でわかりやすいとの好評を得て、前回の2009年に再版したのを併せてこれまでに6000冊印刷されました。

あれから8年、原著に書かれた内容は、すでに20年近く経過しており古すぎるとの声があります。でも年中行事とか台湾の人たちの物の考え方は若干の変化はあるものの大差はないと思っています。「十年一昔」と言いますからもう「二昔」になってしまいました。

前回初代台日会会長施耿郵先生の序文の中で

「いつ読んでも面白く、その新鮮味を失わない。それは著者の鋭い観察眼の賜物であり、日本人として台湾を客観的にかつ総合的に見て書いたためだろう。」と述べておりますが、今回は、一世を風靡した2008年の台湾映画「海角七号」真実版、2015年に「遥かなり台湾6」で紹介したある重度身障者の成功物語、それと2012年の白冷圳に関することなどメルマガ記事3本を特別編として加え、編集しなおし『台湾見聞録』として電子書籍化しました。

台湾大好きな人、台湾に興味を持っている人や台湾ビギナーそして日本語を学んでいる台湾人、また「灯台もと暗し」で意外と台湾のことを知らない人にとっても台湾を再認識する格好の本として多くの人たちの目にふれることを切望する次第です。

この電子書籍を公開しようと編集作業を進めていると今晚30日夜7時半過ぎにテレビニュース速報で「李登輝元総統病逝」のテロップ記事が。

台湾に住んでいる「日本人」の原稿を追加している所でした。あまりのタイミングに驚きました。「岩里正男」の日本名を持つ李総統が22歳まで日本人だったと公言するなど日本との関わりが強く、台湾では民主（デモクラシー）の父と呼ばれくらい、台湾の民主化を実現したり、総統を退いた後も台湾社会に大きな影響力を持っていました。かつて、台湾に住んでいる人は皆「新台湾人」です。団結して行きましようと言われた言葉が今も耳朶に残っています。 合掌！

本書が日台の絆を強め、日台の大きな架け橋を果たしてくれることを願いつつ、あとがきとさせていただきます。 2020/7/30 記

台湾見聞録

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
